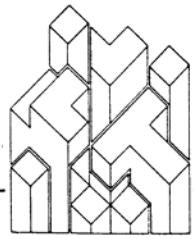
モノグラフ
中学生の世界
vol. 16

©1984. 株式会社 福武書店 教育研究所／加藤智禧・賀川雅子・遠藤純子
放送大学教授 深谷昌志・お茶の水女子大学大学院 斉藤智子・千葉大学大学院 畠山 滋

中学生の職業観



目次

特集●職業抜きの進路指導……2

調査レポート●中学生の職業観

本報告書の要約……5

テーマ設定……6

第Ⅰ章　職業選択の視点……7

1．なりたい職業、なれない職業……7

2．なりたい職業に関する知識……11

第Ⅱ章　未来像の中の職業生活……14

1．職業イメージと自己評価……14

2．達成意欲の低さ……16

3．職業面での未来像の甘さ……17

4．職業観の性差……19

第Ⅲ章　将来の職業生活を支えるもの……24

1．仕事に役立つ力……24

2．未来像の中の職業生活と成績……28

3．父親像との関連……34

まとめに代えて……41

資料1　調査票見本……42

資料2　学年・性別集計表……51

特集

職業抜きの進路指導

放送大学教授
深谷昌志

職業観を持ちにくい

進路指導という用語がある。もちろん、目新しい概念ではなく、第二次世界大戦後ずっと使われてきた用語だが、教育学辞典などによれば、生徒の個性に対応した進路選択が可能になるように指導することだという。

進路である以上、進学先を決めるという意味での進学指導も含まれていようが、その進学指導も、それから先の職業選択が前提となってこよう。したがって、進学指導のかなりの部分を職業指導で占められるのが自然の姿となる。

しかし、高校進学率が低く、かなりの生徒たちが就職していった時代はともあれ、現代では、圧倒的に多くの生徒たちが進学していく。そのため、進路指導は、進学先の選択、そして、進学指導と同意語になりつつある。つまり、その子の学力に応じた進学先選びが進路指導となり、さらにいうなら、進路指導イコール偏差値指導となりやすい。

もっとも、現代の中学生たちにとって、進学先は身近であっても、就職に対しては具体的なイメージを持ちにくいように見える。実業系の高校へ進む場合であっても、就職先が具体化するのは3年先のことになるし、まして、大学進学を予定する生徒にとって、就職は、さらに数年先へずれこむ。しかも、中学生全体の中では、後者の、つまり、進学——大学でなくとも、高校卒業後も、どこかの学校に籍を置く形での——予定者が過半数を上回りつつある。

したがって、生徒たちが職業という言葉にずっと先のことといったイメージを抱き、自分のことのように思えないのも当然なのかもしれない。加えて、この十年来、わが国の失業率は国際社会の中で奇跡的といえるほどの低さを示してきた。特に、若年層は、仕事さえ選ばなければ、失業知らずの情況が続いている。

町へ出てみれば、アルバイト募集のビラが目につく。東京あたりの相場では、それほどハードでない仕事でも、時間給にして5百円程度ときく。となると、一日働ければ、4千円の収入となる。そして、20日働くと月に8万円を手にすることができる。

もちろん、やる気を出して、夜間や日曜に働けば10万円以上の収入も容易になる。国道沿いにある外国系のレストランで、注文をとったり、お皿を洗ったりする。あるいはアイスクリームの専門店の売り子をする。そして、喫茶店のウェイトレスになるなどが10万円の収入を可能にするのである。

おとなが一か月働いても、20万円に達しない場合が多い。小中学校の教師にしたところで、20代の前半は、12～3万円の月収であろう。つまり、中学生に限らず、若い人たちにとって、ある程度のお金をかせぐのは容易であっても、その割に、まじめに働いた場合の収入が少ないのが現実の姿である。

10年ほど前まで、学生たちのアルバイトといえば、家庭教師か、肉体労働、そして、中元かお歳暮の配達などに限られていたように思う。しかし、このところ、喫茶店やスナック、あるいは、パブなどで働く学生が増加している。

パートとフルタイムとの差が少なく、見方によれば、パートの方が優遇されているような感じがする。そうした労働市場のあり方が望ましいとは思えないが、現実問題として、パートとフルタイムとの差が、年一年と、縮小されてきている。

このように、中学生たちからすると、今すぐに勤める気持ちはないが、勤める気持ちになれば、勤め先は簡単に見つかるように思える。その上、いざとなれば、10万ぐらいの現金は手にできるような気がする。これでは、堅実な職業観を持てという方が無理なのかもしれない。

もちろん、中学生たちも、いわゆる一流の大企業へ進むためには、一流の大学卒業が必要なことは知っていよう。しかし、そうした所へ入るのは大変だし、入ったところで、大きな収入が約束されるものではない。それにもかかわらず、仕事だけはハードになる。そんな思いをするくらいなら、気楽に働け、ある程度の収入のもらえる職場を選ぼうという気持ちも生まれてくる。

中学生たちに、つきたい仕事を尋ねると、地方公務員やふつうのサラリーマンなどという答えが返ってくることが少なくない。ビッグな目標を掲げろというつもりはないが、未来の開けているはずの中学生の回答にしては、あまりにスモールサイズで、夢がなさすぎると思う。しかし、そうした気持ちの動きも、今までふれてきたような労働市場の姿を視野に入れると、当然の帰結のように思えてくる。

いずれにせよ、生徒の方に、労働や勤労の観念が欠如している。したがって、職業生活を見通した上で、進路選択をといっても、それは、空論にすぎなくない。その結果、冒頭でふれたように、進路指導は、すなわち、偏差値指導という情況が生まれてくる。

職業に誇りを持てる社会

昭和58年の夏、ヨーロッパを訪ねたとき、西ドイツの学校制度をこまかく視察する機会があった。

周知のように、西ドイツでは、その他のヨーロッパ諸国と同じように、中等教育は、将来の進路に応じて、3つに分れており、そのための進路選択は小学4年修了時に行われている。つまり、4年修了後、子どもたちは、大学進学を前提とした9年制のギムナジウムや、中堅の技術者養成を目的とする6年制の技術系の学校などへ進学していく。

そうだとすれば、小学4年の時の選抜試験に関心が集まり、さだめし、そのための準備教育がなされるのではと思う。家庭教師や学習塾が広まっていても不思議ではない。

しかし、予期に反して、そうした形での補習教育は認められなかった。子どもの一生が決まってしまうのに、どうして準備をしないのか。納得できないので、母親たちにインタービューを重ねてみた。

「ギムナジウムへ進ませたいとは思うけれど、うちの子には向いていないから」、あるいは、「子どもに適した進路を自然の形で選ばせたいから」という返事が多い。西ドイツ

の母親たちも、できることなら、わが子を大学へ進ませたいと思っている。しかし、そうだからといって、無理をさせる気持ちはないという。

日本の感覚からするときれいごとのような感じがしないでもないが、母親たちと会った印象ではほんねのように思える。そこで、もう少し、くわしく、進学後の情況を調べてみた。

その結果によると、西ドイツの母親たちが、子どもに無理をさせない理由は、大別して、ふたつあるように思えた。まず、ギムナジウムへ入学できても、ギムナジウムでは退学制度をとっているので、学力面でついていけないと判定されると、他の学校へ転校させられるはめになる。しかも、その割合が高いのが特徴で、ギムナジウムによっては、1学年の内に3分の1近い生徒が退学になる場合もまれではないといわれる。

せっかくギムナジウムへ入れても退学させられるかもしれない。そうなれば、無理をして入学させても、子どもにとって、逆効果になりかねない。そうした選抜機構を、学校が備えていることが、受験準備の鎮静化へ役立っているのが印象的であった。

それと同時に、もうひとつ、職業学校の充実ぶりも印象に残った。4～5年制の技術系の中等教育を修了後、子どもたちは、さまざまなスタイルの職業学校へ入ることになるのだが、それらが、伝統を誇っているだけでなく、設備や教職員も充実している。

ある町で、パンの職人を養成する職業学校を見学することができた。創立以来2百年近くたったこの学校では、名人といわれるパン職人を一世紀以上にわたって輩出してきた伝統を持つ。当然、この学校の卒業生は引っぱりだこの上に、修業期間があけた後は、高い収入も約束されている。というより、この地域――といっても、関東地方といった感じの広さ――では、この学校の卒業生でないと、パン職人という評価を得られないほどの権威をこの学校は持っているようであった。

当然、学校としては、権威を維持するために努力を重ねており、最新の化学技術を導入した形でのパン作りも試みていた。

もちろん、こうした形での職業学校は、パン作りの学校に限らず、さまざまなスタイルが存在している。したがって、生徒たちからすれば、無理をして、ギムナジウムへ入るより、自分の適性を生かせる仕事を選び、そのための職業学校へ入れば、将来を十分に約束されるのである。そうした情況も、進学の加熱化を阻止している要因なのであろう。

このパン職人、というより、パン作りの親方、または、名人の養成のようなシステムが、日本の場合、欠如している。厳密にいえば、日本でも、のれん分けや徒弟奉公制度など、そうした職人芸を養成する伝統は存在していたのだが、明治以降の近代化の中で、次々と崩れさって、現代はその姿をとどめていない。そのため、実業学校、あるいは、職業学校へ進学し、そして、卒業しても、その後の生活に希望を持てないし、実際にも、社会的に、そうした生活を評価する態度に欠ける。

こうした背景が、日本の場合、実業学校に対する人気のなさを生み出す要因なのであろう。このところ、さいわいなことに、専修学校や各種学校に人気が集まり始めている。もちろん、本稿で紹介した西ドイツの職業学校と比べれば、日本の学校が伝統を欠くだけでなく、内容的に見おとりがするのは否定しがたい。しかし、西ドイツでも、電子工学などの関連の学校の中には、最新さを売りものにしているものが少なくない。したがって、日本の学校も、伝統や古さは求めにくいとしても、専修学校なりに充実を図り、学校を魅力的なものにする努力が必要であろう。そうした中から、伝統も育ってくる。西ドイツの職業学校を見ている内、魅力的な職業学校を作ることが、職業抜きの進路指導の偏りをなくすための第一歩のように思えてならなかった。

調査レポート●中学生の職業観

放送大学教授　深谷昌志
お茶の水女子大学大学院　斉藤智子
千葉大学大学院　畠山　滋

本報告書の要約

①なりたい職業

なりたい職業のトップは、男子はプロスポーツ選手(32%)、女子は花屋(24%)であった(P.8 図1、P.9図2)。

②職業に関する知識

中学生たちは、仕事の現場を実際に見る機会は少なく、職業についてのくわしい知識(資格など)を持っていない(P.12図4、P.12図5)。

③小さな自己像

現在の自分は一流の職業人の中学時代にはもちろん、父親の中学時代にも遠く及ばないと考えている(P.15図7)。

④低い達成意欲

一生懸命がんばっても一流の職業人になるのが「とても」「かなり」無理と考える者が、歌手で66%、大学教授で85%に達する(P.16図8)。

⑤明るい未来像と職業生活への不安のなさ

幸せな家庭をつくれる(73%)など、生徒たちは漠然と明るい未来を思い描いている。また、将来の職業生活にもそれほど不安を持っていない(P.17図9、P.18図10)。

⑥職業観の性差

女子は男子に比べ、学年が上がるにつれて高い職業への達成を断念する傾向が強くなる(P.23図13)。

⑦職業生活に役立つのはがまん強さ

将来職業についたとき役立つのは、勉強ができることよりがまん強さや体の丈夫さと考えている。この傾向は成績の良し悪しにかかわりなく見られる(P.25図14、P.26表4)。

⑧成績の良さが未来像を支える

成績の良い生徒は、家庭生活、職業生活、進学、すべての面で明るい未来像を描くことができる(P.28図15～P.30図18)。

⑨父親像との関連

子どもの職業観を形成するにあたって、父親の職業人としての影響力は少なくない(P.36表11～P.38表13。P.39図22～P.40図24)。

テーマ設定

中学時代は微妙な時期にあたっている。小学校のころは、とりあえず後に中学校がひかえているし、おとなになるのははるかに先のことであるから、職業について夢のような気持ちを抱いていてかまわない。したがって、もちろん職業についての見方の幼さも伴っているから、「将来なりたいもの」が好きなテレビ番組の主人公の職業であったり、宇宙パイロットや大会社の社長であったり、あるいは聞く度ごとに違っていたり、「わからない」であったりしても別段かまわない。そしてそれが「スーパーマン」であってもよい。しかし中学生ともなると、そうはいかない。入学してまもなく、「進路」という聞き慣れない言葉を耳にして、「これからの見通しをある程度持っていかねばならないのだなあ」とぼんやりした自覚を持ち始める。しかし、ここでもとりあえずは高校がひかえているから、進学すべき高校に関心がうばわれ、将来の職業について思いをめぐらすことは少ない。そうした意味では現代の中学生は職業観をきちんと身につけていないように思う。

最近の子どもを見ていると、将来に対して良い意味での気負いを持たない子が多いように見える。「モノグラフ小学生ナウvol. 3－6『職業観』」でも報告されたように、小学生の間でさえ、夢のない子が増えているという。単なる高望みは認識の甘さでしかない場合もあるので、高い夢を掲げることが無条件によいとはいえないのは確かであろう。しかし、今の子どもたちのそうした感覚は、自己像の矮小化に微妙につながっているようで気がかりになる。そこで本レポートは、今の中学生たちの抱いている職業イメージを探り、そこに現在の自分、未来の自分がどう重なり合っているのかを明らかにしていきたい。

サンプル数

（人）

学年＼性別	男子	女子	計
1　年	351	342	693
2　年	365	338	703
3　年	395	373	768
計	1111	1053	2164

第Ⅰ章 職業選択の視点

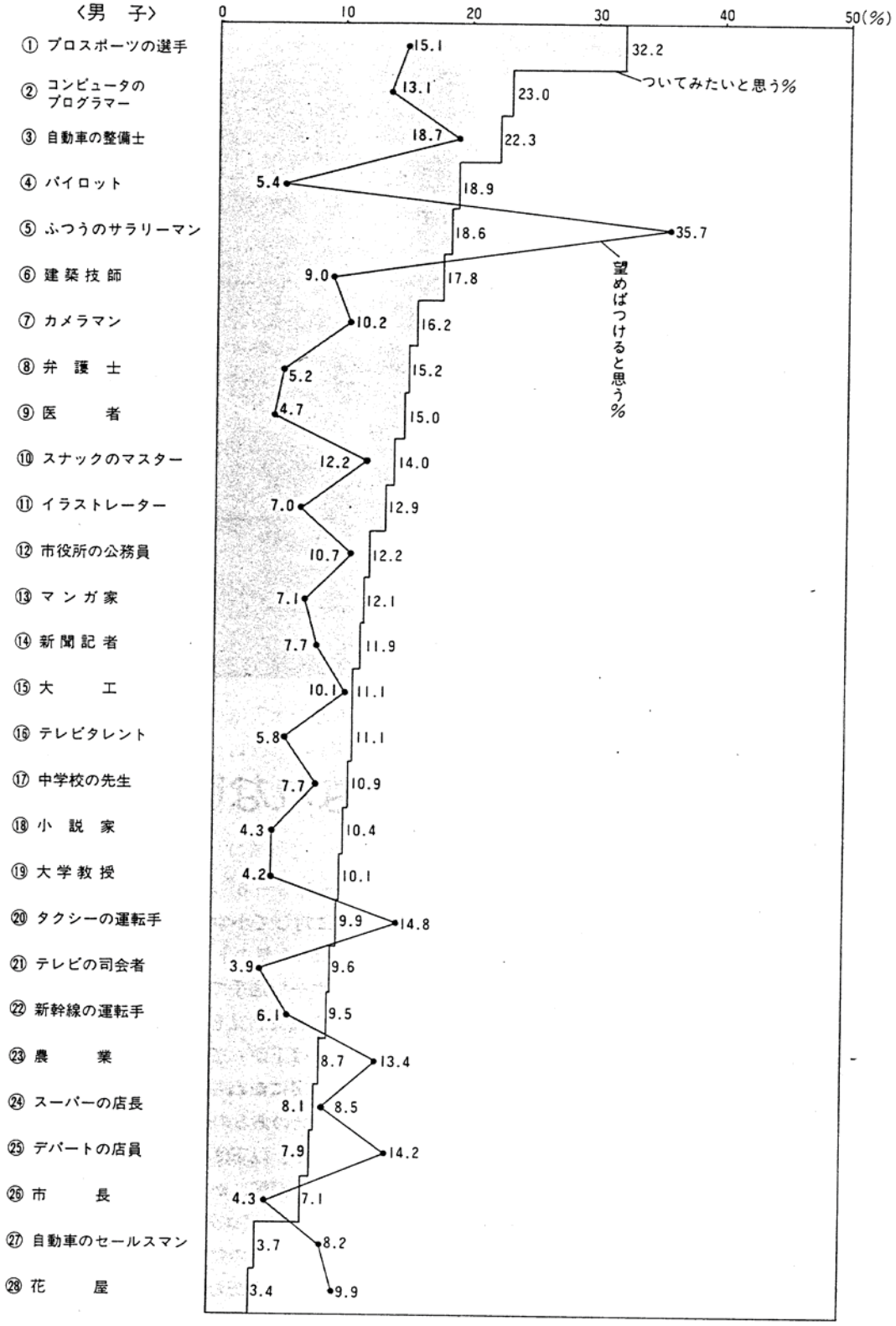
1．なりたい職業、なれない職業

中学生の職業観を調べるにあたってまず知っておきたいのは、どんな職業に対して中学生は憧れを感じるのか、ということであろう。そこで28項目にわたってさまざまな職種をあげ、生徒たちにつきたいと思う職業に○をつけさせてみた。その結果を男女別にグラフ化したものが図1、図2である。まず図1の棒グラフの数値を見ていただきたい。これは各々の職業についてみたいと答えた者のパーセンテージだが、人気のNo.1を誇っているのがプロスポーツの選手であり、全体の3分の1にも及ぶ者がなれるならなってみたいと思っているのである。ちなみに、「モノグラフ小学生ナウvol.3－6『職業観』」によると、同様の質問に対して小学生男子の間で44%の数値で、やはり人気のトップにあがっているのが、プロスポーツ選手である。中学生ともなるとさすがに現実感覚を身につけてきたためか、多少数値は下がってくるが、第1位にあがっている事実にかわりはない。

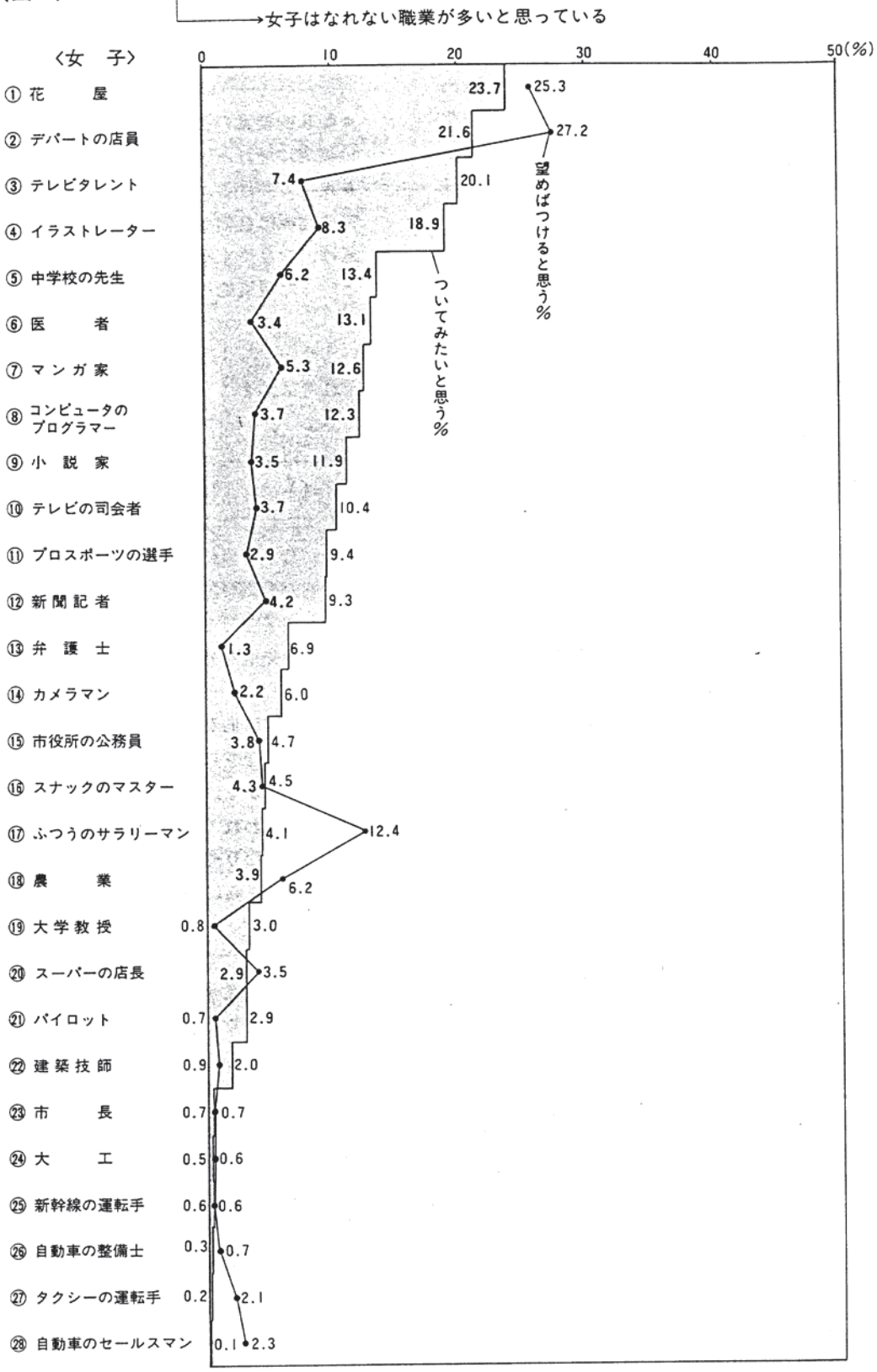
次に人気のあるのがコンピュータのプログラマーであり、以下③自動車の整備士、④パイロットと、機械にかかわる職業が続いている。コンピュータのプログラマーなどは、いかにも最近の労働市場の動向を反映しているように見えるが、生徒たちが仕事の内容をどこまで

（図１）つきたい職業とそのなりやすさ

→男子の３分の１がプロスポーツの選手にあこがれている



（図２）つきたい職業とそのなりやすさ



理解しているかとなると疑問である。①から④まで仕事の中身が現実にどういうものであるかは別として、男子たちに「カッコよさ」を感じさせる響きを持つ点で、共通点が認められるようである。そこには趣味と実益を兼ねた職業に対する憧れがひそんでいるような気がする。これに反して、販売業はあまり好まれないらしく、たとえ人の上に立つスーパーの店長であっても、デパートの店員とほとんどかわらぬ数値で下位に並んでいる。同じ自動車をあつかう仕事でも、整備士には人気が集まるのに対し、セールスマンは最下位から2番目に位置している。こうした職業が男子にとって魅力がないのは、あまり「カッコいい」イメージを持たないからであろうか。6位から10位あたりの職業を見てもカッコよさが優先している感がある。

なお、図1の中で「ふつうのサラリーマン」という項目が5位にあがっているのは印象的である。残念ながらサラリーマンがそれほど魅力的な職業とも思えないのだが、図中の折れ線グラフに注目してほしい。これは同じ28項目について、「つきたいと思えば必ずつける」と答えた生徒のパーセントを示したもので、「ふつうのサラリーマン」のところだけ、異常に高い数値が得られている。その他で「望めばつける」（なりやすさ）が、「ついてみたい」（願望）を凌いでいるのは、下位の方の⑳タクシーの運転手、以下6項目にすぎない。それ以外はすべて、「望めばつける」が「ついてみたい」を下回っている。つまり生徒たちは理想と現実を区別して考え、仕事はなりたいと思うほどにはなれないものだ、と感じていることがわかる。特に弁護士や医者、小説家、大学教授、テレビの司会者、市長などの専門管理職については、つけそうもないと達成を断念している態度が目につく。その上で、一番達成可能な職業としてサラリーマンが、人気の職業の第5位にあがってきているのであろう。

これらのことから男子には、

- 趣味的要素の強い、なんとなくカッコいい職業に憧れる。
- 現実につけるかとなると、ほとんどの職業の達成に自信がなく、難しそうな職業を避け、なりやすそうな職業を候補にあげるといった現実的対応が強い。

という傾向がみうけられよう。

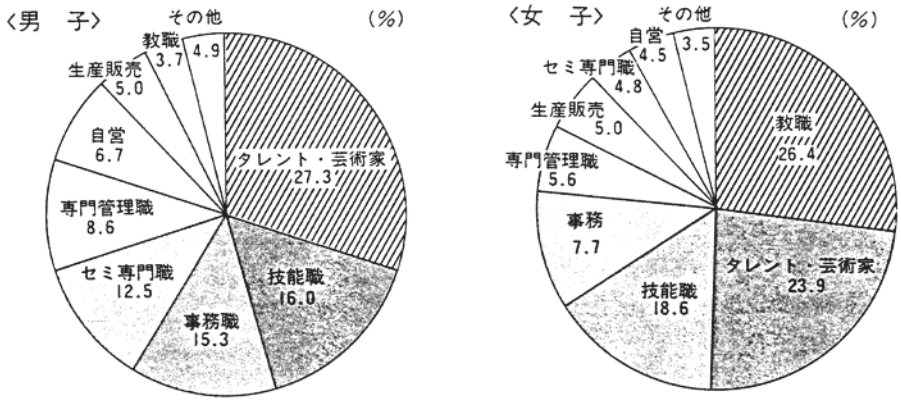
それでは図2にうつり、女子の方の傾向を見てみよう。トップが花屋、2位がデパートの店員、以下テレビタレント、イラストレーターと続き、女子は女の子らしいささやかな夢を大切にしている様子がうかがわれる。なお、これらの項目には含まれていないが、小学生女子の人気職業のトップは小学校の先生であり、中学生でもかなりの生徒が、幼稚園や小学校の先生を希望しているものと予想される。

比較的上位にあがっている職業を見ると、女性でもそれなりにがんばれる職場に人気のあることがわかる。28項目の中には、一般に男の仕事と思われている職業が多く含まれるとはいえ、「なりやすさ」の数値は全体的に男子と比べてさらに低くなっており、また、「願望」よりも「なりやすさ」の数値が低いのも男子と共通している。なお、ついてみたいし、つけると思う仕事の第一位に花屋があがってくるあたりに、女性の職業進出の厳しい現状がそのまま反映されているように考えられる。その点で職業に対する女子の目は、男子より以上に現実的であるとみられる。それにしても、男まさりに何でもやってみたいと思っているような女子の少ないことは、心寂しい限りである。

2．なりたい職業に関する知識

図1、図2で得られた結果を確認する意味で、次にフリーアンサーで希望する職業を書かせ10分類して図3にまとめてみた。つきたい仕事はという問いに対し、男子の場合、プロスポーツ選手を含む「タレント、芸術家」を望む者が一番多く、教職や生産販売、自営

（図3）つきたい仕事



付表　職業分類表*

1．専門管理職

大学教師・弁護士・医師・重役以上の管理職・国会議員・市長・科学者・政治家・建築家(ビルなどの)会計士・裁判官・薬剤師・駅長・郵便局長など

2．セミ専門職

記者・神主・技師(エンジニア)・パイロット・大きな船の船長・設計士・税理士・通訳・獣医・刑事・編集者など

3．技能職**

理容師・美容師・タイピスト・消防夫・大工・キーパンチャー・看護婦・歯科衛生士・職人・コック・生け花やお茶の先生・自動車修理工・栄養士、機関士・板前・ウェイターなど

4．教　職

幼稚園・小学校・中学校・高校の教師・保母など

5．事務職

サラリーマン・銀行員・ＯＬ・秘書・公務員・警官など

6．販売生産労働

セールスマン・運転手・店員・工場労働者・漁師など

7．自　営

農業・小売店主・小規模工場主・林業など

8．タレント・芸術家

マンガ家・ピアニスト・作家・歌手・スポーツ選手・デザイナー・スチュワーデス・スタイリストなど

9．その他

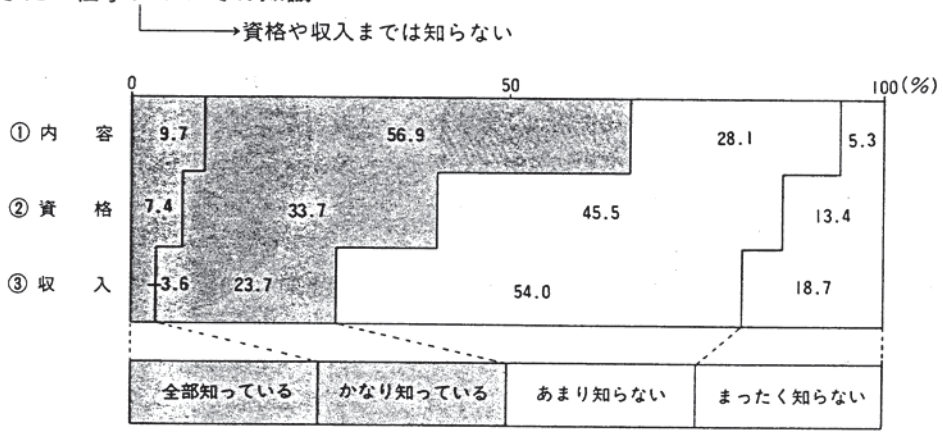
＊ 子どものイメージを尊重した分類で、必ずしもおとなの場合と一致しないものも含まれる。

** 技術のマスターが必要で、多くは個人的に仕事する。

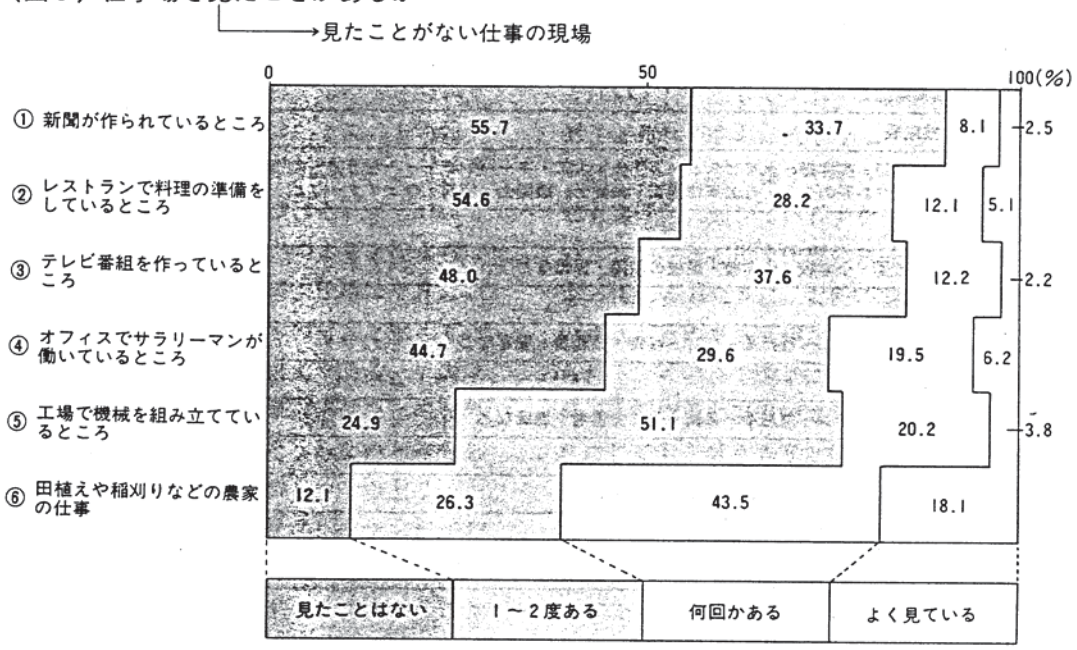
を志望する者は、やはり少ない。女子では教職志望者が全体の4分の1に及ぶ。これは先ほど述べたように、小学校や幼稚園の先生になりたがる者が多いためなのであろう。

では中学生たちは、どの程度の知識をもとにこれらの職業を選んでいるのであろうか。内容、資格、収入の3項目に分けて、知識の度合いを尋ねた結果が図4である。仕事の内容については、70%近くの者がかなり知っているつもりでいる。が、その職業につくためにはどのような資格が必要か、となると知っていると答えた者は40%ほどで、「知らない」が過半数を占める。また収入については、ほとんどの生徒が知らないと答えている。この結果を、収入などより仕事の内容で職業を選んでいると解釈すれば評価できるが、それにしても資格についてあまり知らなすぎる印象を受ける。したがってここではむしろ、職業

（図4）つきたい仕事についての知識



（図5）仕事場を見たことがあるか

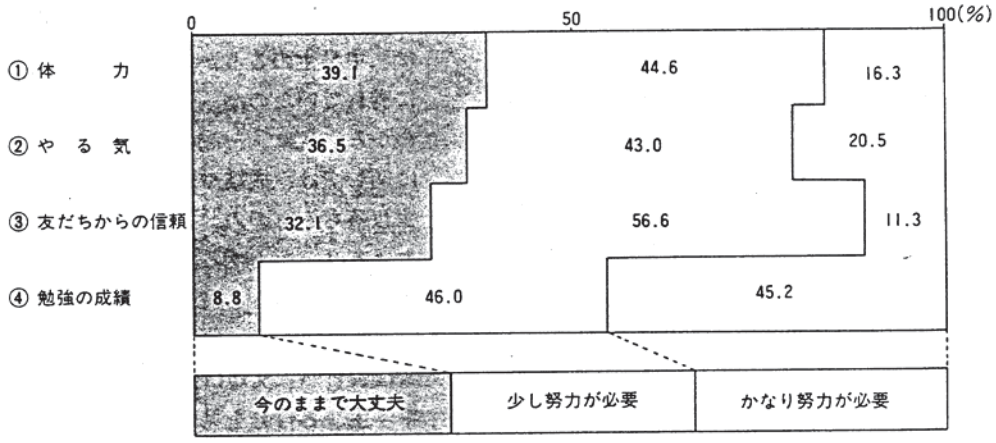


選択に対する態度に具体性を欠いている点が指摘できよう。

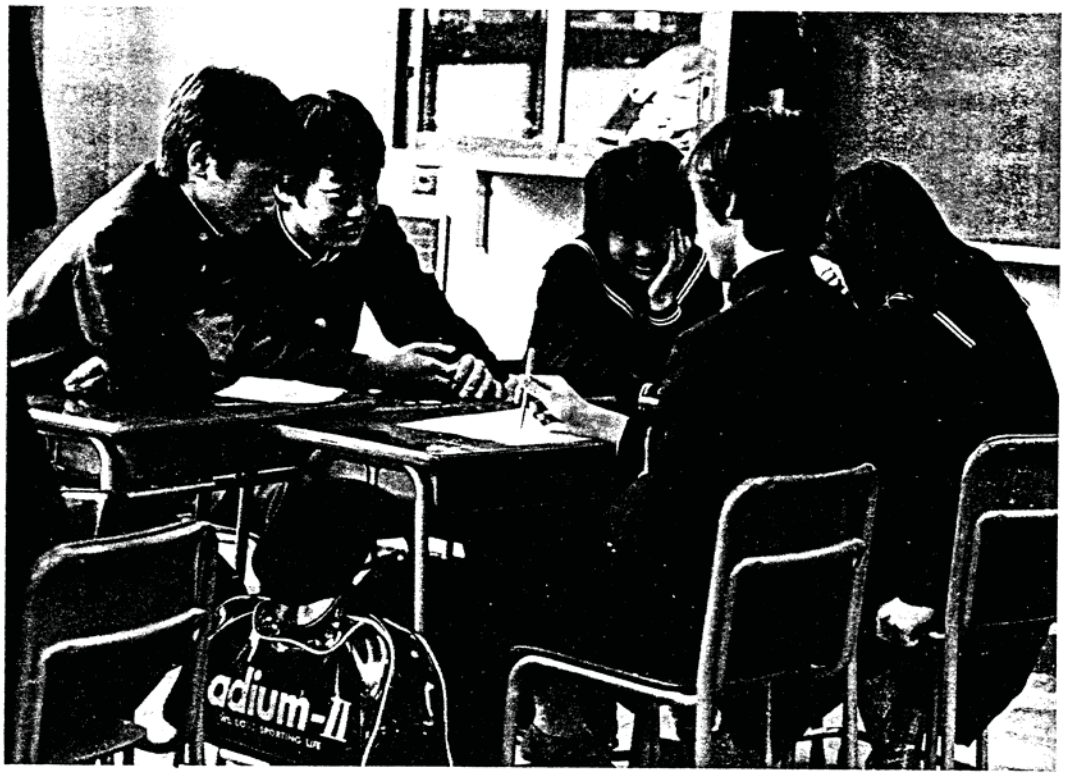
それでは、中学生たちが割合に「知っている」と思っている仕事の内容に関する知識は、どこから得られたものなのであろうか。図5に、実際に仕事の現場に接した経験があるか、その有無を示した。田植えや稲刈りなどは郊外では自然に目にふれる機会も多いので、「何回かある」率が高いが、それでも「見たことがない」者や「1～2度しか見たことのない」者が、全体の40%近くに達している。その他の仕事については、50%前後の者が一度も見たことがなく、「1～2度ある」まで含めた数値を見ると、ほとんどの生徒が日常、仕事の現場を目にする機会がないことがわかる。現在の職業は非常に多様化すると同時に専門化し、生徒たちでなくともその全貌を知ることはほとんど不可能になってきている。プロモーターやディレクター、マネージャーなどの横文字を使って、目新しく聞こえるもののそのくせ何をするのかはっきりしない職業が次々に現れてきている。また企業内でも、社長――部長――課長――係長といった、これまでの単純なピラミッド構造では説明できないさまざまな役職が生まれている。そして、一番身近な職業人であるはずの父親の仕事の中身についてさえ、よくはわからず、オフィスでデスクに向かい書類を作成しているという程度の、テレビドラマの情景をそのままあてはめて想像しているにすぎない場合が多い。現代の中学生たちは、労働体験はもとより持っていないが、それに加え直接に仕事風景を目にする機会もなかなか得られず、その結果マスコミなどから漠然とした職業イメージを入手し、それに基づいて自分の将来の職業を設定している可能性が強い。

次の図6は、仕事につくのに今の実力で大丈夫なのかを尋ねたものだが、さすがに勉強の成績だけは、かなり努力をしなければ望む職業につけないと考えている率が高い。しかし、「体力」や「やる気」、「信頼」に関しては「今のままで大丈夫」か、「少し努力をすれば大丈夫」、と思っている者が大部分を占める。これは一見、自信の表れのように見えるが、逆にいうと今のままで十分か、少し努力をすればなれるというような職業を生徒たちが選んでいるということであろう。無理な目標設定をしないで、そこそこのところを狙おうとする現実的な姿勢が、ここにも表れているように考えられる。

（図6）つきたい仕事に対する見通し



第II章 未来像の中の職業生活



1．職業イメージと自己評価

図7のグラフに目をとめてほしい。これは、(1)〜(4)までの一流の職業人及び、(5)の父親のそれぞれについて、その中学時代の人物像を想定させ、それらと(6)の現在の自分の評価とを比較して示した結果である。グラフは「英語の成績」から、「がんばる力」までの6項目につき、「クラスの中でトップ」、及び「上位」であったろうと答えた者のパーセンテージをプラスして、スパイダーグラフに表したものである。グラフ中のアミ目部分の面積の一番広いのは(4)の大学教授であり、次に政治家、大会社社長、といずれも体力以外は平均的に外に広がっている。こういう偉い人たちは、中学生のころから何でもオールマイティに秀れていたのだ、と考えられていることがわかる。次に、一流のテレビタレントと父親に関しては、成績やまじめさなどについては少し落ちるものの、社長や政治家などより体力はあり、がんばる力も政治家なみである。それらに比べると、(6)の自分つまり、自己像の卑小さは際立って感じられる。一流の職業人はおろか、父親にもはるかに及ばぬダメな中学生、と自分を見ているらしい。成績などは、相対評価で上位層が限られているから、ある程度仕方ないとして、まじめさやがんばる力などに関しては、せめて父親にもう少し

近い数値が出てもよいような気がする。

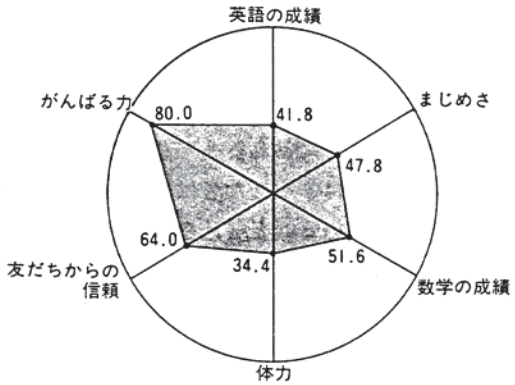
このように、中学生のころという現在の自分と同じ尺度を使っても、現在の自分と一流の職業人との間には、大きな開きがみられる。

こうしたデータを見ると多くの中学生がビッグな目標を抱けないのも、当然なのかもしれないと思えてくる。

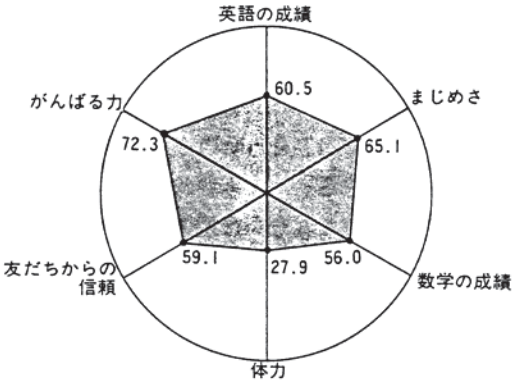
（図7）職業人の中学時代のイメージ

→一流の職業人とほど遠い自己像

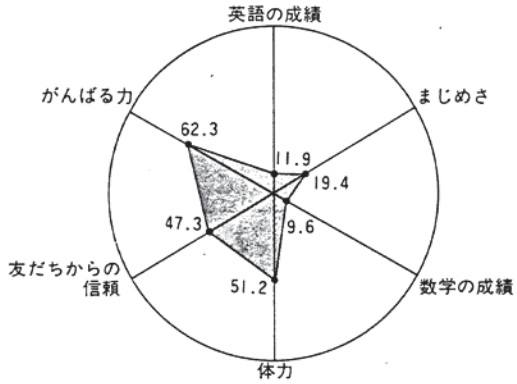
(1) 大きな会社の社長



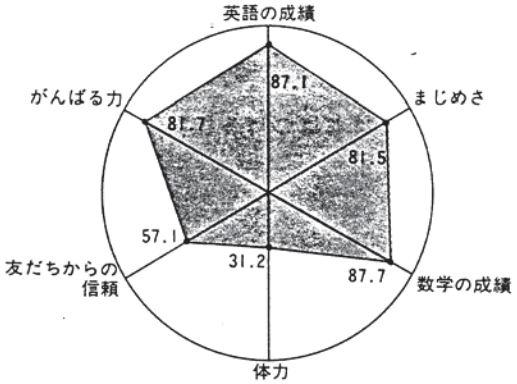
(2) 国会議員などの政治家



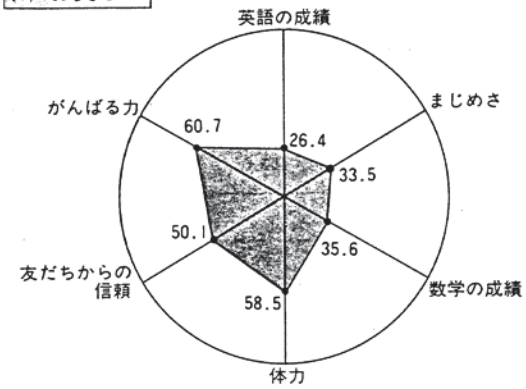
(3) 一流のテレビタレント



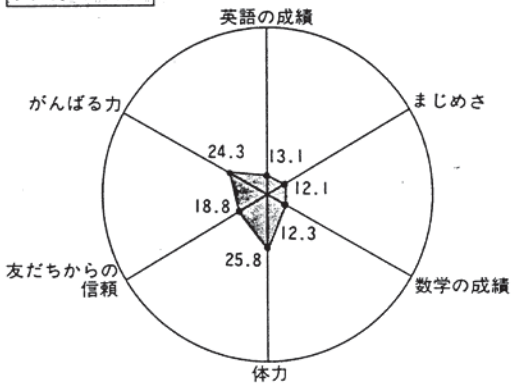
(4) 日本を代表する大学教授

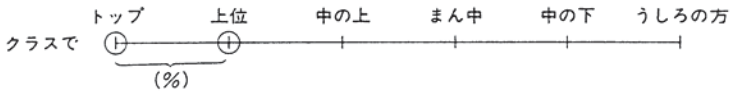


(5) お父さん



(6) 今の自分





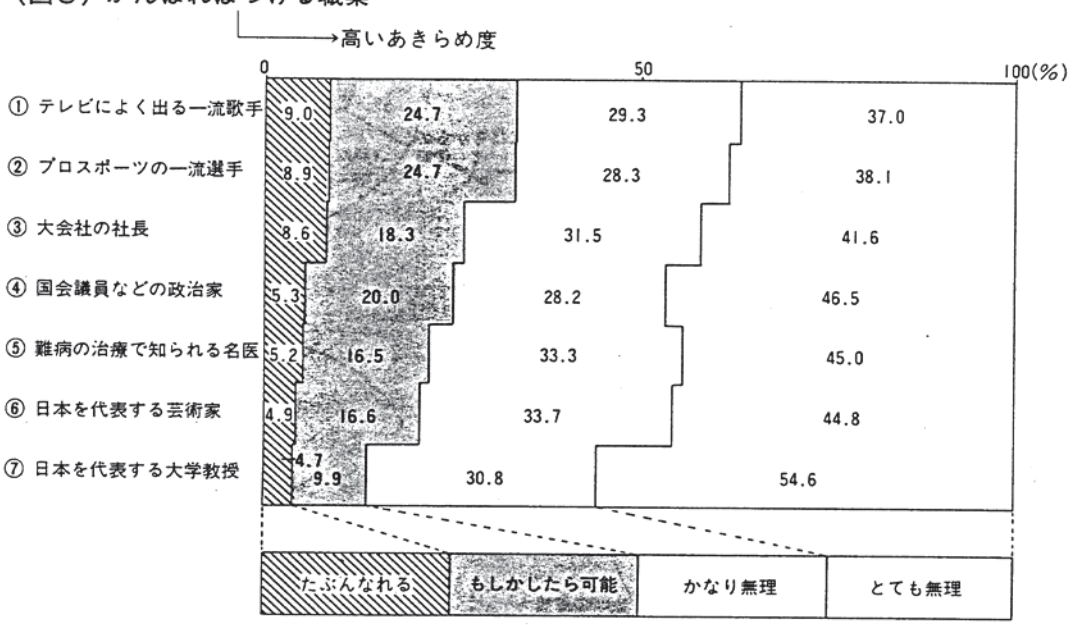
2．達成意欲の低さ

今まで見てきたように、生徒たちの多くは、現在の自分は一流の職業人の中学時代には遠く及ばない、と考えている。しかし、これは、あくまで現時点の自己評価に限られている。したがって、今後の努力次第で、差が縮まっていくのは十分可能であろう。少なくとも、前途ある中学生たちには、そういう気持ちでいてほしい気持ちがする。

そこで、「なるならないは別として、一生懸命にがんばったら…」職業で一流の域に達せると思うかを尋ねてみた。その結果を図8に示したが、「たぶんなれる」割合が最高の「テレビによく出る一流歌手」でも9％と1割に満たない。逆に、一生懸命にがんばっても「とても」「かなり」無理とする生徒は、比率のもっとも少ない「一流歌手」でも66％を占め、「大学教授」に至っては、85％に達している。

たしかに、ここにあげた「一流の」あるいは「日本を代表するような」職業人になるのは、容易なことではあるまい。したがって、見方によっては、生徒たちは自分の将来を正しく見通している、と言えなくもない。しかし、これらが、前途ある中学生の反応だと思うと、やはり、あきらめがよすぎる、という印象をぬぐいきれない。可能性を知る前に、限界を悟ってしまった生徒たちを見ているようで、何とも淋しい気持ちがする。

（図8）がんばればつける職業



3．職業面での未来像の甘さ

生徒たちは、すでに一流の職業人への到達をあきらめている。では、職業の面を含め、将来全般について、彼らは、どんな展望を持っているのであろうか。

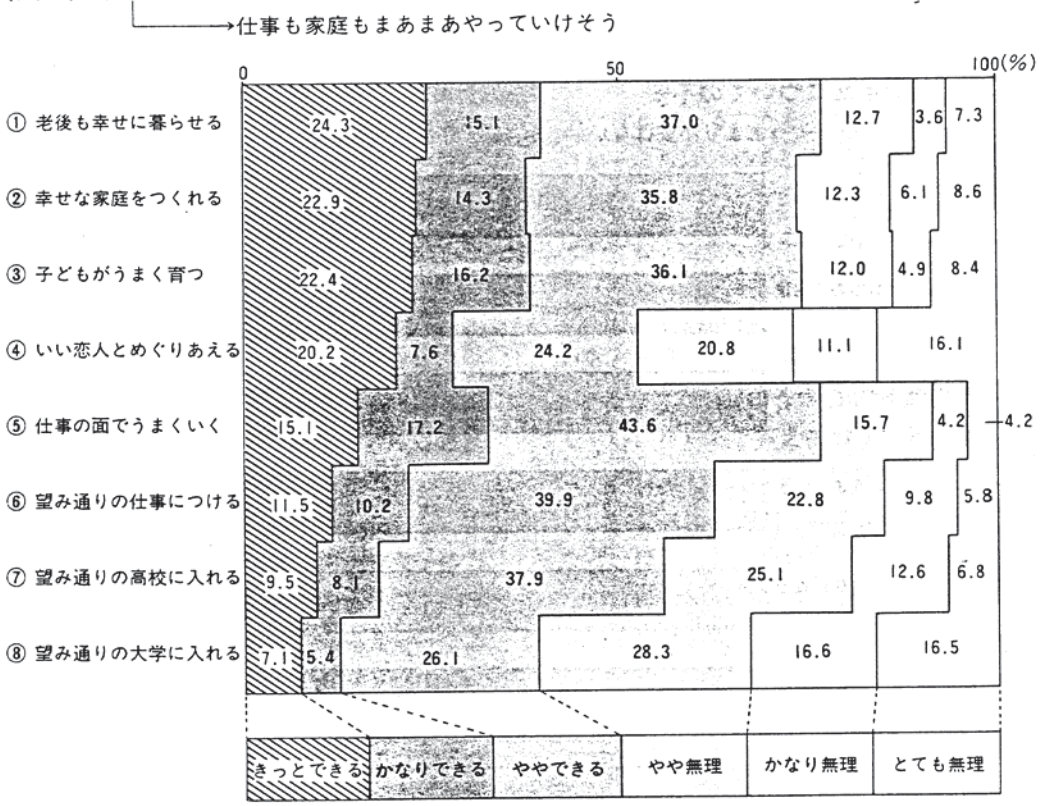
図9は、生徒たちにこれからの人生を予想してもらった結果である。図が示す限りでは、生徒たちは、未来の達成を少なくとも無理とは思っていない。したがって、生徒たちの予想にさほどの暗さは見い出せないともいえよう。そして、達成意欲の低さから考えると、意外に明るい未来像を描いている。一流の職業人になれないからといって、生徒たちは未来に悲観するわけではないのが予想外であった。

そこで、もう少し詳しく図を見ていこう。

左側の項目は、「きっとできる」の数値が高い順番に並べてある。順位を見ると、上位4位までは、「幸せな家庭をつくれる」等、非職業的なものが占めている。したがって、相対的には、仕事より家庭に関することが、未来像全体の明るさを支えているといえよう。

しかし、職業に関する項目も、「ややできる」の数値まで含めると、「仕事の面でうまくいく」で約75%、「望み通りの仕事につけ

（図9）未来像



る」でも60％強に上回っている。したがって、生徒たちは、一流という枠を外してしまえば、職業の面でもまあまあやっていけると考えている。

しかし、図９の２項目のみを手がかりとして、要求水準を下げれば、生徒たちの職業観は明るいと結論づけるのは安易すぎるかもしれない。そこで、将来の職業生活についての不安を尋ねた結果を、図10に示したので、参照してほしい。

図から明らかなように、職業生活上の不安も低い数値にとどまっている。生徒たちは、仕事仲間とはうまくやっていけるし、体力にも自信がある、責任ある仕事も大丈夫で、難しい仕事も何とかやれそうだ、と思っている。

これらの結果から、生徒たちはビッグな目標はともあれ、そこそこの職業生活に対しては明るい見通しを抱いている、と喜んでよいのであろうか。しかし、何か釈然としないものが残る。

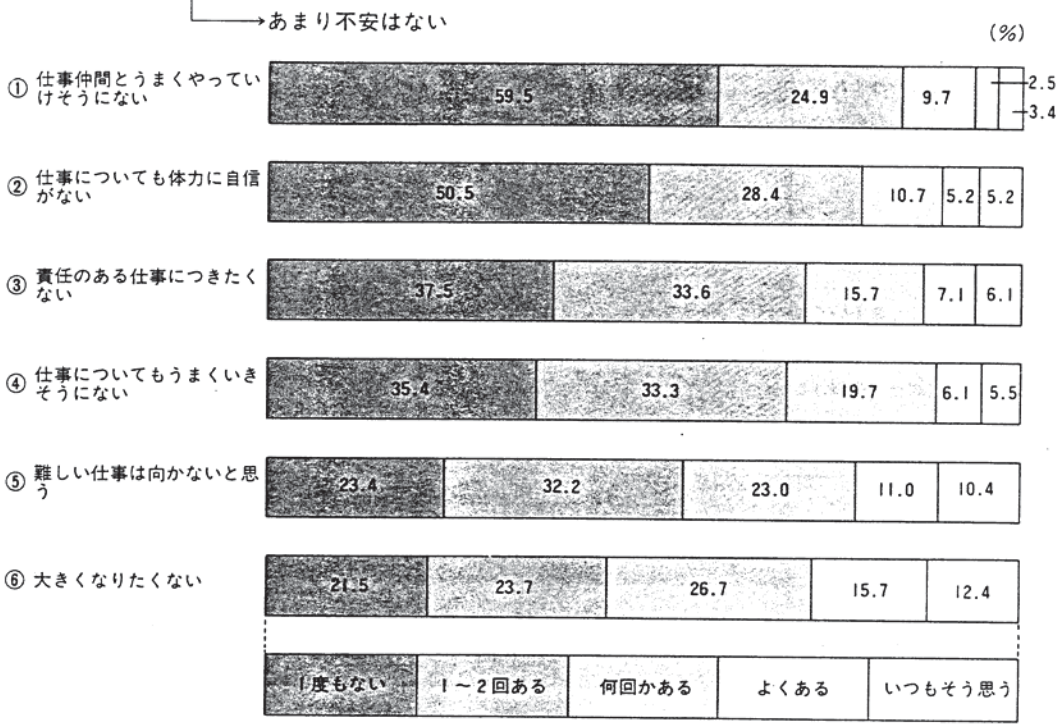
なるほど、生徒たちは、未来を悲観しているわけではない。職業生活への不安に悩むこともないように見える。

こうした数値を考えるにあたって、生徒たちが、さまざまな学習や経験を手がかりとして自分はやっていけるという自信を持ち、その自信に支えられて明るい未来像を描いているのであれば、問題は少ない。例えば、実際の労働がどのくらい体力を消耗するかを知った上で、自分の体力で乗り切れる自信を持ち、不安はない、と答えてくれれば、理想的である。

しかし、残念ながら、ここまでのデータは、この理想とは遠い状況を明らかにしている。

実際に労働している姿を見た経験や、つきたい職業についての知識に関する図を思い出していただきたい。生徒たちは、自分のつきたい職業についてさえ、それほどよく知っているわけではない。実際の労働を見た経験も乏しい。生徒たちは、実際の労働に必要な体力、職場で起こるさまざまな人間関係とトラブルを知らないまま、不安はない、と言って

（図10）職業生活についての不安



いるのにすぎない。

つまり、生徒たちの描く職業像は、適切な判断材料を欠いたまま形成される漠然としたイメージにとどまっている。

生徒たちは、希望と自信を持って、明るい未来像、不安のない職業生活を思い描いているのではない。現在のところは手元に不安を起こさせる材料がないので、何となく楽観的に未来を展望しているにすぎない。これが実態に近いように思われる。

この点をふまえ、もう一度、図9を見てみよう。「きっとできる」の数値が最も低いのは、「望み通りの大学に入れる」7％であり、次いで「望み通りの高校に入れる」10％となっている。周知のように、高校・大学進学に関しては、偏差値を中心として、さまざまなデータがあふれている。このように判断材料が豊富にある領域では、生徒たちは、楽観的な見通しを捨て、現実的な――決して明るいとはいえない――見通しをたてざるを得なくなっている。

したがって、職業についても、もう少し、具体的な情報が増加してくると、生徒たちの職業観も、現在以上に暗さを増す可能性が強い。

4．職業観の性差

近年、女性の職業観に変化が見られるという。寿命の延長や少産型の生涯設計、高学歴化、そしてライフスタイル等の変化を背景に一生仕事を続けていきたいと願う女性が少しずつ増加してきている。しかしそうした反面女性たちの職業に対する構えが甘いという指摘も根強い。もちろん、すべての女性が甘いのではないが、大学卒女子の平均勤続年数が2年強といったデータに接すると、企業が高学歴女性を敬遠する気持ちも無理からぬように思えてくる。そこでここでは、職業に対する甘えの意識が、中学生のころから女性の中に存在しているものなのかどうかを探るため、性差に関するデータを少し追っていくことにしたい。

まず、職業の断念率の差を見てみよう。図11を見ると、全体としては点線――女子の方が大学教授、政治家、大会社社長、プロスポーツ選手などに、とてもなれないといったあきらめの姿勢が強く、10％から20％近くの差が出ている。もっとも、これらの職業についている女性が少ないのも確かなので、女子たちがなるのが難しいと思うのも、故なきことではない。しかし一方で、②芸術家や③名医などは、男女間でほとんど開きがない。したがって、高度な能力を必要とする仕事だからといって女子の断念率が必ずしも高いわけではないことが認められる。つまり、社会的制約さえなければ男子にひけはとらない、と女子が考えていることを示している。

女子たちは、必ずしも職業的な達成を断念しているわけではないらしい。そこでもう少し他のデータで、そのことを確かめてみよう。図12は、大きな会社に入り、定年まで勤めたときの自分の地位を予測させた結果を示している。男子の場合、課長と部長が全体の半分以上を占めているが、女子の6割弱が部課長くらいになれると答えており、そうした意味では、女子の反応は男子に基本的には一致している。実際には大企業に女性の部長や課長など、ほとんど存在しないという事実を彼女たちは知らないのであろうが、それにしても、現時点では、女子が男子と同程度にがんばれる意気込みを持っていることは確かなようである。さらに、将来に対する全体的な見通しについても、男子とほとんど変わらないことが表1からも読みとれよう。

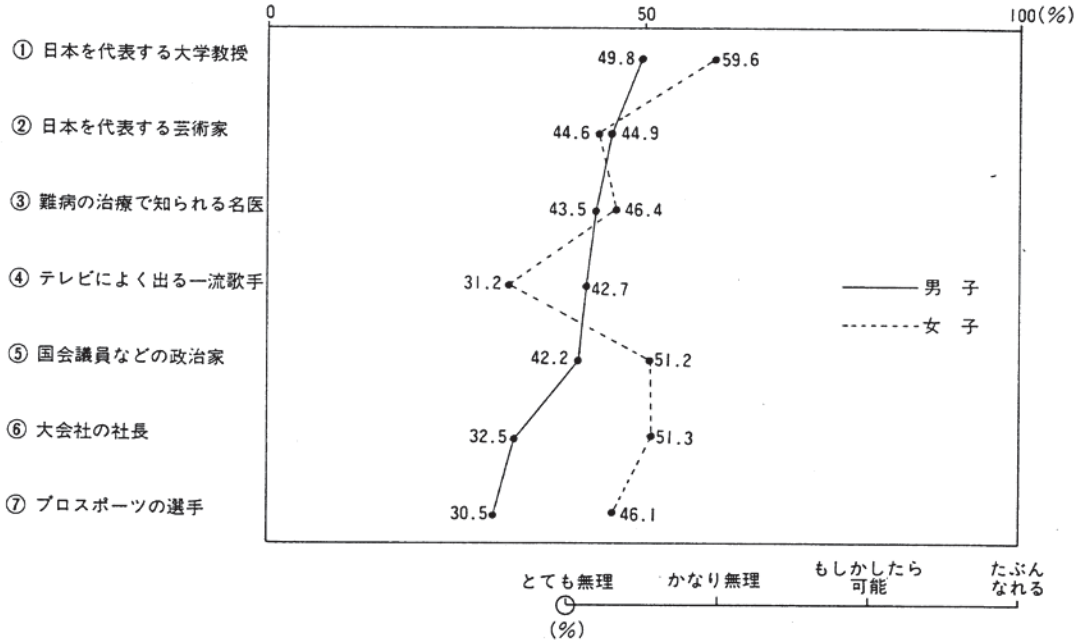
それでは、職業に対する考え方にまったく性差はないのかというと、すでにあげたデータの中で、男子と女子の好む職業がまったく異っていたように、どこかに意識の違いが表れるはずである。

表2では、①～⑤のような内容が仕事に役立つかどうかについて、男女で見方が異なるのかどうかを掲げたが、数学の成績、がまん強さなど、まったくといってよいほど男女間に差がないことがわかる。ただごくわずか「友だちからの信頼」、「他人への親切」など、女子の方がそれらを大切と思う割合が増え、「服装のセンス」なども、男子は半分以上の者が仕事には関係ないと考えているのに対し、女子の方で「役立たない」と答えた者は3分の1ほどであるのが目につく。こうしたところにちょっとした考え方の聞きが表れている。

ここまで紹介したデータでは、性差は必ずしもシャープとは言いがたい。しかし、自分の向き不向きを答えさせると、さすがに男女間で差が出てきてしまうのは興味深い。**表3**を見ると、①などのように、女性だからといって楽をしたいという気持ちはないことがわかる。しかし、後の項目を見ると、女子の場

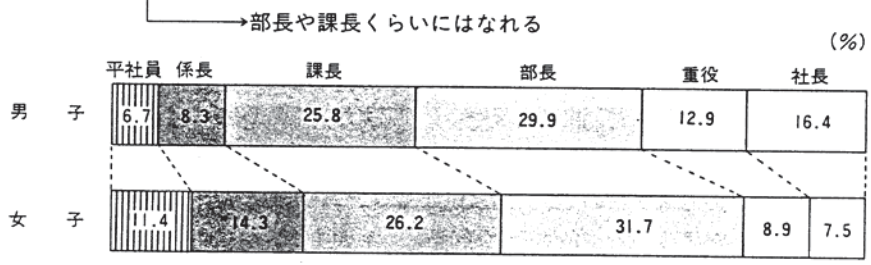
(図11) がんばってもなれない職業×性別

→女子の断念率は男子とさほど変わらない



(図12) 定年時の地位・見通し×性別

→部長や課長くらいにはなれる



合、難しい仕事より誰にでもできる易しい仕事を、物をとりあつかう仕事よりは人に接する仕事を好む傾向が強くみられる。特に④の「決断力のいる仕事」は、79%と、ほぼ女子の8割が避けていて、「親切さが必要な仕事」の方に傾斜している。

これらの傾向を手がかりにすると女子中学生たちは、男女の開きが大きいとは思っていないらしい。しかし向き不向きという点になると、女子は人と接する仕事に向いている、と考えていることがわかる。そして決断は男子で、親切が女子の特性と見るあたりになると、昔ながらという感をぬぐいがたい。

昨年、木村治美さんが訳した「シンデレラ・コンプレックス」の中で、成功を目前にするとたじろいでしまう、女たちの自立への不安が描かれて話題をよんだことがあった。このテーマ自体はそう目新しいものではない。しかし幼いころから身に刻まれた庇護願望が、女性たちの自立への意志を挫けさせてしまうという指摘は、女性と職業との関連をとらえる際の論争点となり続けてきた。そして、トップレディと呼ばれる女性たちの進出がめざましく伝えられる現代にあってもなお、このテーマが新鮮な印象を与えるというのは、それだけ根の深い問題なのであろう。

なお、この章のはじめにあげた断念率の開きを学年・男女別に示したのが図13である。男子よりも女子の方に、学年が上がるにつれて大きな目標への達成を断念する傾向が強まることが、図中より読みとれよう。こうしたデータを通して、女性の中に、知らず知らずのうちに責任ある立場から逃げ、成功を避ける態度、つまり、職業的な達成からオリる傾向が形成されているのが読みとれよう。

（表１）将来像×性別

→男女差のない将来像

(%)

項目 ＼ 尺度		とても無理	かなり無理	やや無理	ややできる	かなりできる	きっとできる
① 望み通りの高校に入れる	男子	7.5	10.1	23.7	38.8	8.0	11.9
	女子	6.0	15.2	26.8	37.1	8.1	6.8
② 望み通りの大学に入れる	男子	15.6	15.8	25.6	28.1	5.7	9.2
	女子	17.5	17.6	31.0	24.0	5.2	4.7
③ 望み通りの仕事につける	男子	6.7	7.6	20.4	39.3	11.9	14.1
	女子	4.8	12.2	25.3	40.8	8.4	8.5
④ いい恋人とめぐりあえる	男子	19.9	11.3	18.0	22.4	7.2	21.2
	女子	11.9	11.1	23.7	26.2	7.9	19.2
⑤ 幸せな家庭をつくれる	男子	11.1	6.4	13.8	33.9	13.3	21.5
	女子	6.0	5.8	10.8	37.7	15.4	24.3
⑥ 仕事の面でうまくいく	男子	5.3	4.5	15.3	39.5	18.8	16.6
	女子	3.1	3.9	16.2	47.9	15.6	13.3
⑦ 子どもがうまく育つ	男子	10.0	5.3	11.3	35.8	16.0	21.6
	女子	6.6	4.6	12.8	36.4	16.3	23.3
⑧ 年をとってからも幸せに暮らす	男子	9.4	3.4	13.1	34.8	15.0	24.3
	女子	5.0	3.8	12.3	39.2	15.4	24.3

（表２）仕事に役立つこと×性別

(%)

項目 ＼ 尺度		とても役立つ	かなり役立つ	やや役立つ	あまり役立たない	まったく役立たない	むしろ害になる
① 数学が得意	男子	28.4	25.0	24.2	12.6	5.0	4.8
		53.4			22.4		
	女子	24.2	28.3	29.0	12.1	4.0	2.4
		52.5			18.5		
② 友だちから信頼されている	男子	36.3	27.7	25.2	7.1	2.0	1.7
		64.0			10.8		
	女子	38.8	33.9	21.2	4.5	0.9	0.7
		72.7			6.1		
③ がまん強い	男子	53.0	23.8	13.8	4.7	1.7	3.0
		76.8			9.4		
	女子	55.5	25.2	13.4	3.4	1.2	1.3
		80.7			5.9		
④ 他人に親切である	男子	34.5	27.5	26.8	6.9	1.5	2.8
		62.0			11.2		
	女子	44.1	29.3	19.9	5.1	0.8	0.8
		73.4			6.7		
⑤ 服装のセンスがよい	男子	8.8	10.5	25.3	34.7	12.5	8.2
		19.3			55.4		
	女子	13.1	18.6	33.8	26.7	6.0	1.8
		31.7			34.5		

（表３）向いている仕事×性別

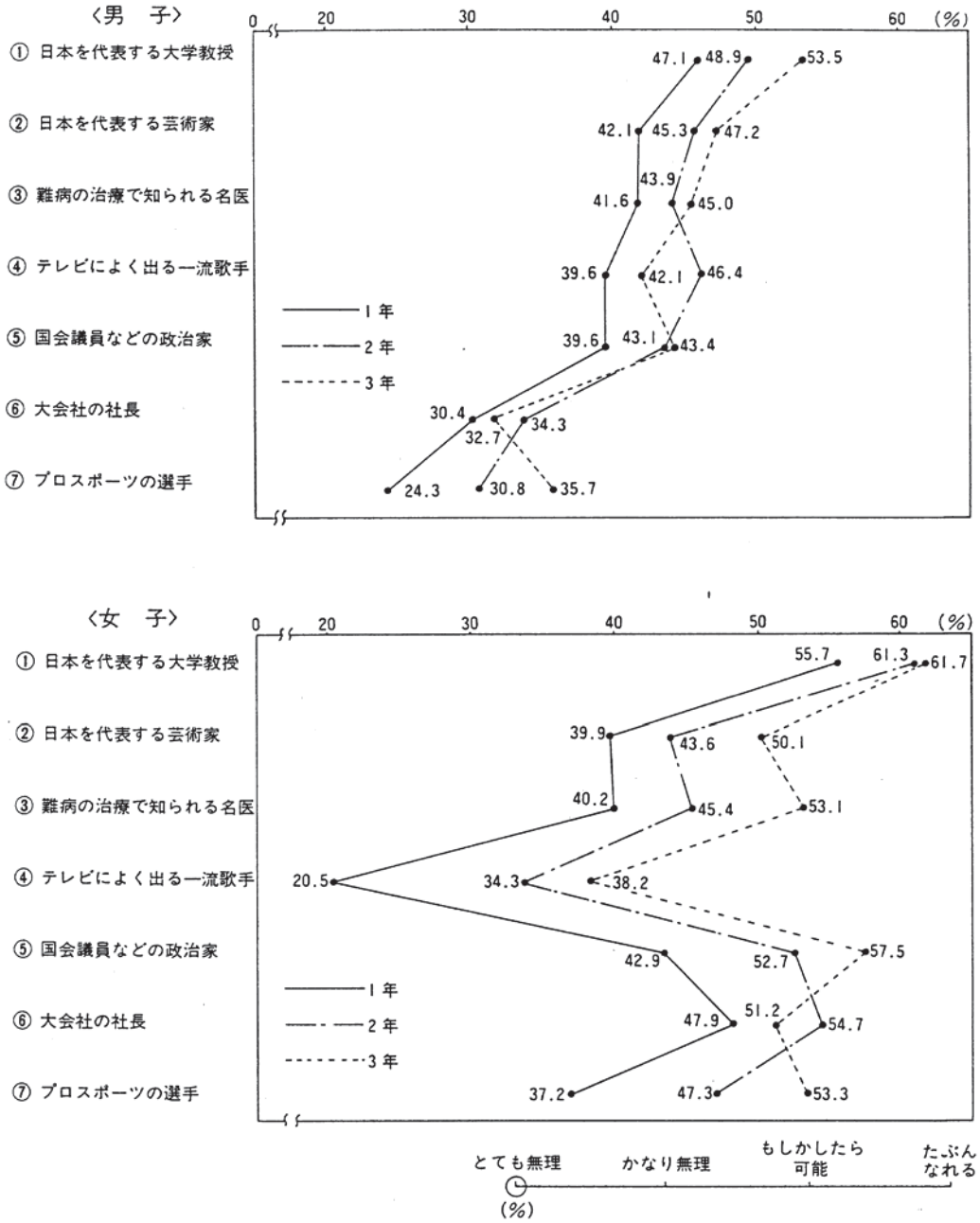
→責任のいらない易しい仕事を好む女子

(%)

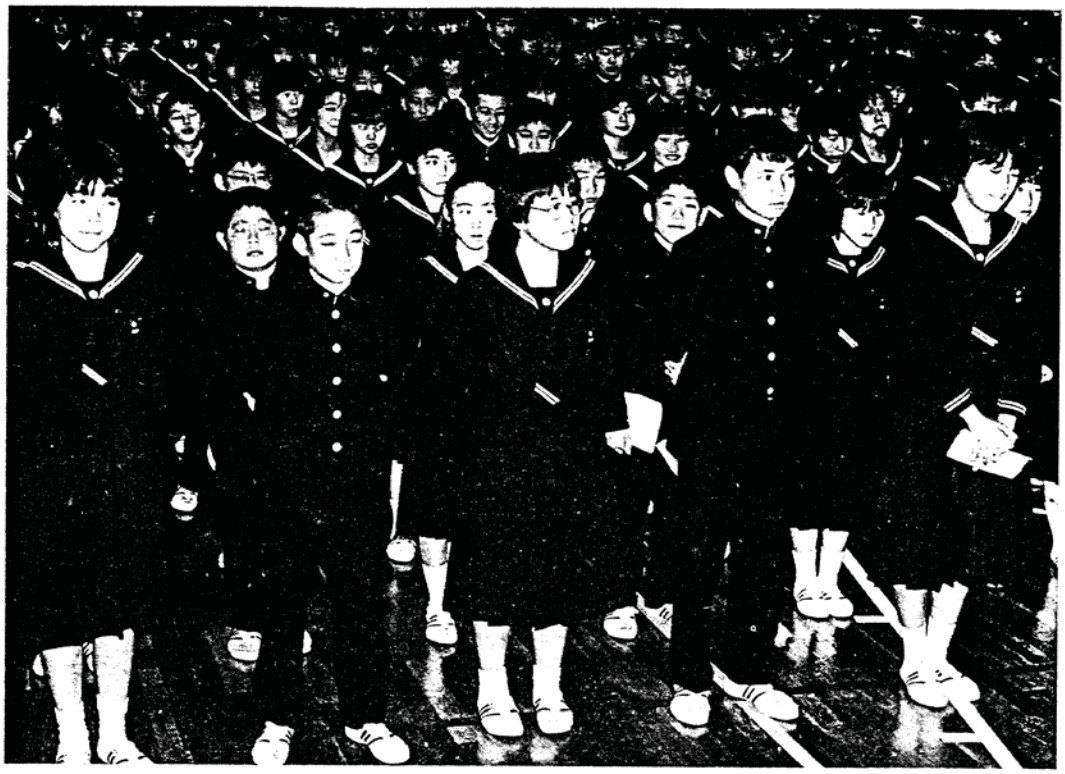
A		絶対A	ややA	ややB	絶対B	B
① 疲れるが収入の多い仕事	男子	42.4	44.5	9.4	3.7	楽だが収入のあまりない仕事
		86.9		13.1		
	女子	28.1	55.3	13.8	2.8	
		83.4		16.6		
② 誰にでもできる易しい仕事	男子	19.2	28.6	36.1	16.1	知識が必要な難しい仕事
		47.8		52.2		
	女子	28.4	37.5	27.3	6.8	
		65.9		34.1		
③ 人に接する仕事	男子	19.5	24.9	31.8	23.8	物をとりあつかう仕事
		44.4		55.6		
	女子	26.5	35.4	26.0	12.1	
		61.9		38.1		
④ 決断力のいる仕事	男子	17.1	29.3	31.5	22.1	親切さが必要な仕事
		46.4		53.6		
	女子	7.4	13.6	41.9	37.1	
		21.0		79.0		
⑤ 人目をひくハデな仕事	男子	10.7	17.2	44.5	27.6	落ちついた地味な仕事
		27.9		72.1		
	女子	9.5	25.4	43.7	21.4	
		34.9		65.1		

(図13) がんばってもなれない職業×学年・性別

→女子は年を追うにつれて悲観的に



第III章 将来の職業生活を支えるもの



1．仕事に役立つ力

生徒たちの描いている未来像は、社会の現実から遠く離れたところで形成された漠然としたイメージに根ざしている印象が強い。しかし、未来像とは、本来そういうものなのかもしれないという気もする。むしろ重要なのは、そのイメージが明るいのか暗いのか、そして、そうした明暗がなぜ生じるのかであろう。そこで、ここでは、生徒の職業での未来像を規定するファクターに迫っていくことにしたい。

まず、図14を見ていただきたい。これは、将来仕事をうまくやるのに役立つものを尋ねた結果を示している。

実体はともかく、日本は学歴社会であるという認識は、広く浸透している。学歴社会という前提に立つと、その第一関門、高校入試に近づきつつある中学生は、当然学業成績の良さや勉強ができることを重視するのではという感じがする。

しかし、実際は、図からわかるように、「がまん強い」が「とても役立つ」で54%にのぼり、次いで、「体が丈夫」52%、「他人に親切」39%と、勉強や成績とは直接関係ない項目が続く。勉強、成績については、「授業を熱心に聞く」の「とても役立つ」は31%、「数学が得意」26%、「英語が得意」25%とな

っており、予想外に低い数値を示している。

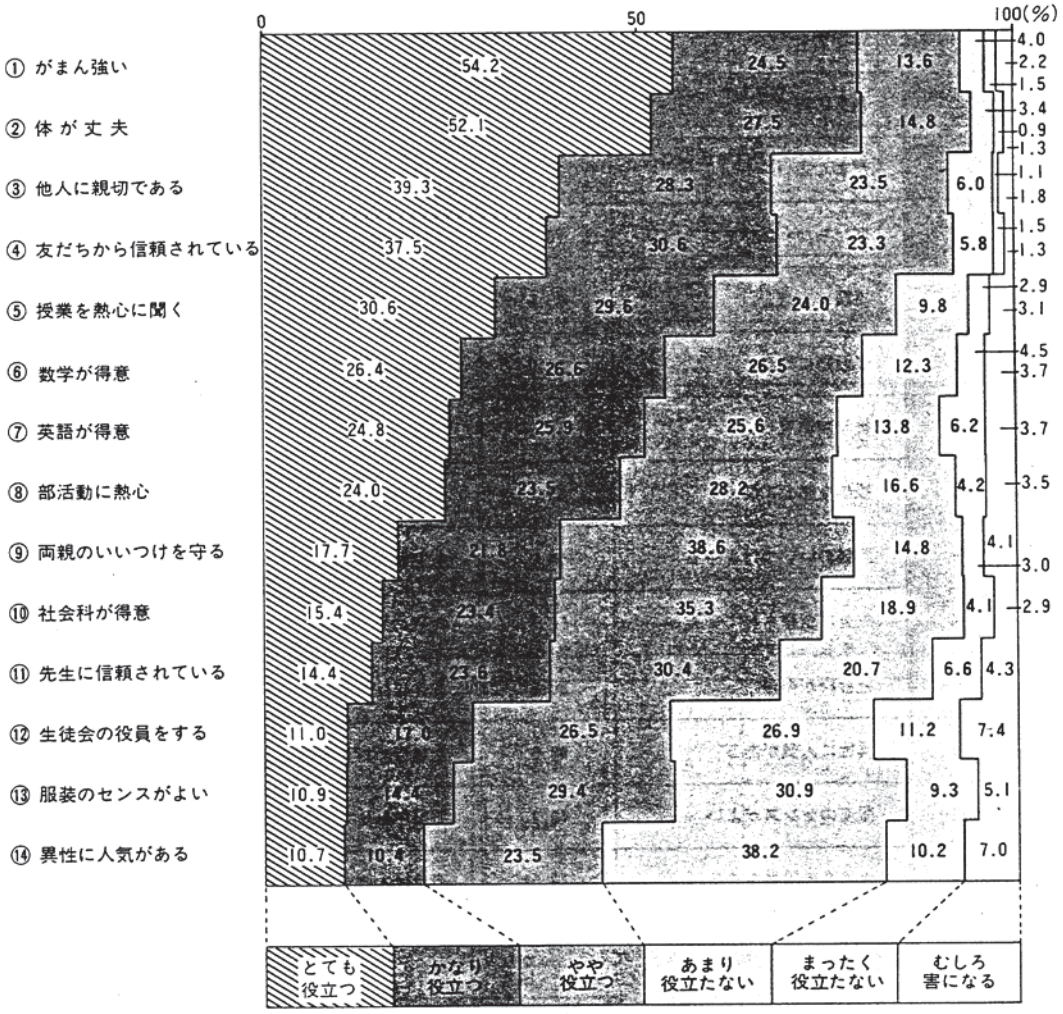
仕事をしていくうえで必要なのは、なによりも、がまん強さと体力だろう、それに比べれば、勉強の得意・苦手は、それほど大きな意味を持たないだろうという見方で、こうした中に生徒たちの願望も含まれているのであろうが、全体としてみると、かなり妥当で、落ちついた職業観のように思える。

それでは、図14の結果は、学業成績の影響をまったく受けないのであろうか。成績の良い生徒ならば、より授業態度や教科の得意さを重視するかもしれない。そこで、数学の成績との関連を見ると、**表4**の通りとなる。クラスの中で「トップ・上位」の生徒と、「中の下・下位」の生徒との間に、数値の上で若干の差は認められるものの、勉強に関する能力より、がまん強さや人間関係の能力が、仕事面では大事だという傾向は共通している。さらに、念のため体力についても比較を行ったが、項目の順位に大きな変動は見られなかった(**表5**)。

「がまん強い」「体が丈夫」の項目からは、〝根性〟〝体力〟、「他人に親切」「友だちからの信頼」の項目からは〝人の和〟といった言

(図14) 仕事に役立つものは

→勉強よりがまん強さや親切さが役立つ



葉が、連想されないでもない。生徒たちは、マスコミからの情報などで、仕事に必要といわれているものを、おぼろげながら感じとっているのであろう。

結論を出す前に、もう少しデータを見ていこう。**表6**に、生徒の自己評価を示してある。項目は、「とてもそう」の数値が高い順に並べてあるが、この順位を、先ほどの図14の順位と比べていただきたい。耐久力、人からの信頼にかかわる項目が、勉強にかかわる項目の上位にくるという点で、二つの図表は類似している。

したがって、中学生たちは、おとなになってから職業生活を送るのに必要とされる「がんばる力」や「体力」に自信を持っており、そうした意味では、成績がなにかとものをいう学校の中ではともかく、社会に出たらなんとかやれるだろうというような気持ちを、抱いているのであろうか。

（表4）仕事に役立つ×数学の成績

→成績による順位の変動は小さい

(%)

順位	トップ・上位群		中の下・下位群	
	項目	数値	項目	数値
1	体が丈夫	84.4	がまん強い	79.1
2	他人に親切	79.8	体が丈夫	78.4
3	がまん強い	76.3	友だちから信頼されている	69.9
4(3)	友だちから信頼されている	76.3	他人に親切	68.6
5	英語が得意	65.0	授業を熱心に聞く	60.2
6(5)	部活動に熱心	65.0	数学が得意	51.6
7	数学が得意	63.6	英語が得意	50.9
8	授業を熱心に聞く	63.1	部活動に熱心	43.8
9	両親のいいつけを守る	54.0	社会科が得意	39.7
10	先生に信頼されている	50.7	両親のいいつけを守る	38.4
11	社会科が得意	50.6	先生に信頼されている	35.0
12	異性に人気がある	48.6	生徒会の役員をする	27.0
13	服装のセンスがよい	40.7	服装のセンスがよい	22.9
14	生徒会の役員をする	39.0	異性に人気がある	18.1

とても役立つ　かなり役立つ　やや役立つ　あまり役立たない　まったく役立たない　むしろ害になる

(%)

（表５）仕事に役立つ×体力

（%）

順位	トップ・上位群		中の下・下位群	
	項目	数値	項目	数値
1	体が丈夫	89.6	がまん強い	75.6
2	がまん強い	83.9	体が丈夫	72.2
3	他人に親切	74.5	友だちから信頼されている	66.6
4	友だちから信頼されている	72.7	他人に親切	65.4
5	授業を熱心に聞く	65.8	授業を熱心に聞く	55.7
6	部活動に熱心	62.2	数学が得意	50.9
7	数学が得意	54.3	英語が得意	48.6
8	英語が得意	52.4	部活動に熱心	40.0
9	両親のいいつけを守る	46.6	社会科が得意	37.7
10	先生に信頼されている	45.1	両親のいいつけを守る	36.2
11	社会科が得意	43.6	先生に信頼されている	32.7
12	異性に人気がある	31.7	生徒会の役員をする	25.9
13	生徒会の役員をする	31.2	服装のセンスがよい	23.4
14	服装のセンスがよい	29.6	異性に人気がある	16.4

とても役立つ　かなり役立つ　やや役立つ　あまり役立たない　まったく役立たない　むしろ害になる

（%）

（表６）自己評価

→勉強にかかわるものは自信がない

（%）

成績＼項目	がんばる力	体力	友だちからの信頼	まじめさ	英語の成績	数学の成績
（クラスで）トップ	9.3	7.7	6.1	4.5	3.8	3.6
上位	15.0	18.1	12.7	7.6	9.3	8.7
中の上	23.4	22.5	23.1	16.3	17.4	17.5
まん中	31.7	29.0	42.7	39.5	31.5	31.8
中の下	12.6	12.6	8.7	19.4	19.5	21.3
うしろの方	8.0	10.1	6.7	12.7	18.5	17.1

2．未来像の中の職業生活と成績

生徒たちは、仕事に役立つ力として、学業成績の良さをそれほど重視していなかった。中学校関係者の間から、成績の良し悪しが生徒の意識を強く規定すると指摘されることが多い。しかし、それに対し、図14の結果は、職業に関しては生徒の意識構造が、多少異なる可能性を暗示している。

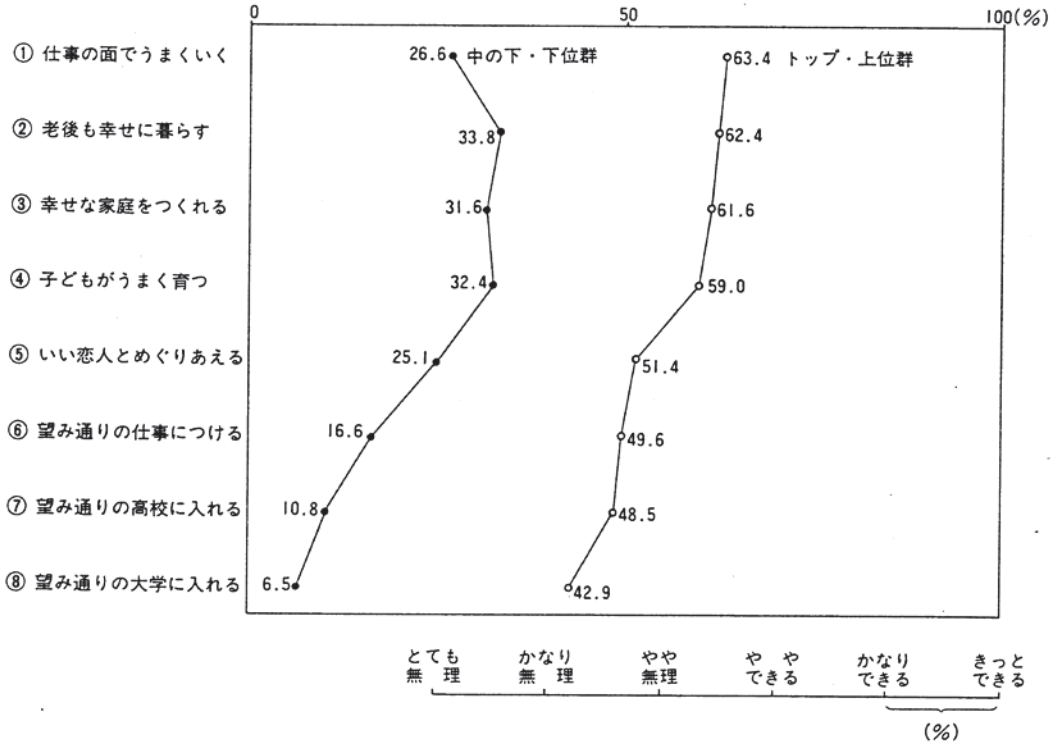
そこで、生徒たちのまじめさやがんばる力、体力、数学の成績などによって、職業についての見通しがどの程度異なるのかを調べてみた(図15、図16、図17、図18)。

いずれの場合も、自己評価がクラスの中でトップ・上位とした生徒が、中の下・下位とした生徒より、明るい未来像を描いている。

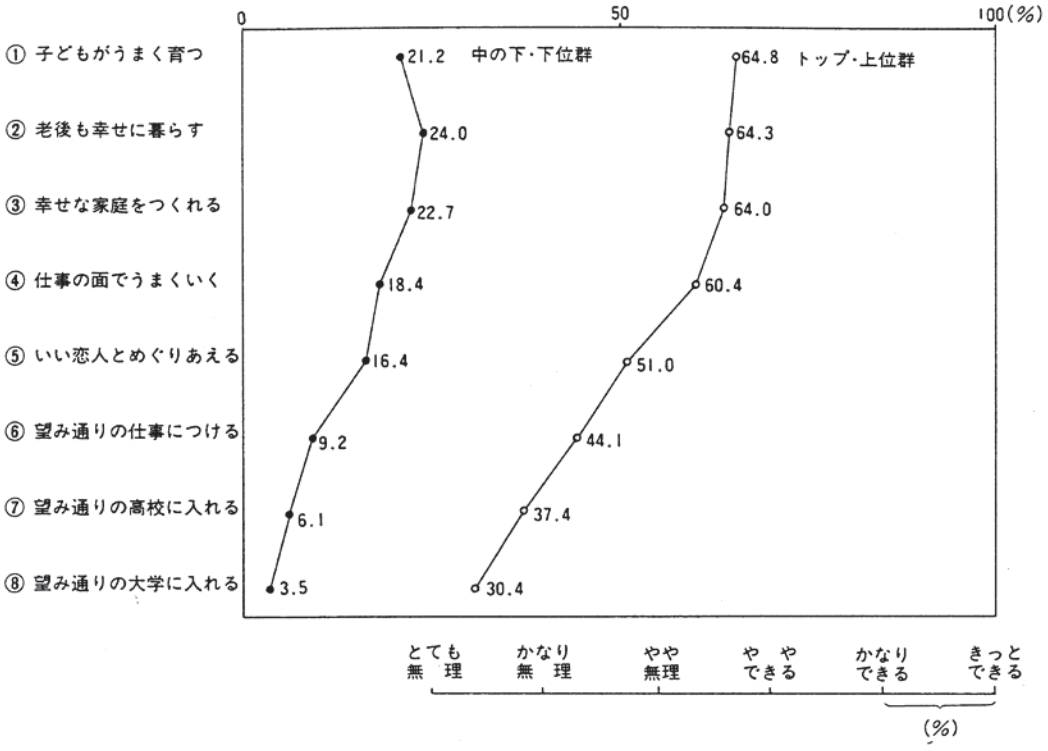
体力であれ、まじめさであれ、いずれにせよ現在の自分に自信を持っている者が明るい未来像を抱いているのは、当然のことといえよう。したがって、ここでは、二つのグループ間の差より、職業に関する項目の数値が、四つの特性間で、差が見られるかどうかが、重要になろう。そこで、生徒の未来像を、次の三領域に分け、検討していくことにしたい。

①家庭生活…○いい恋人とめぐりあえる
　　○幸せな家庭をつくれる
　　○子どもがうまく育つ
　　○老後も幸せに暮らせる
②職業生活…○望み通りの仕事につける
　　○仕事の面でうまくいく
③進学……○望み通りの高校に入れる
　　○望み通りの大学に入れる

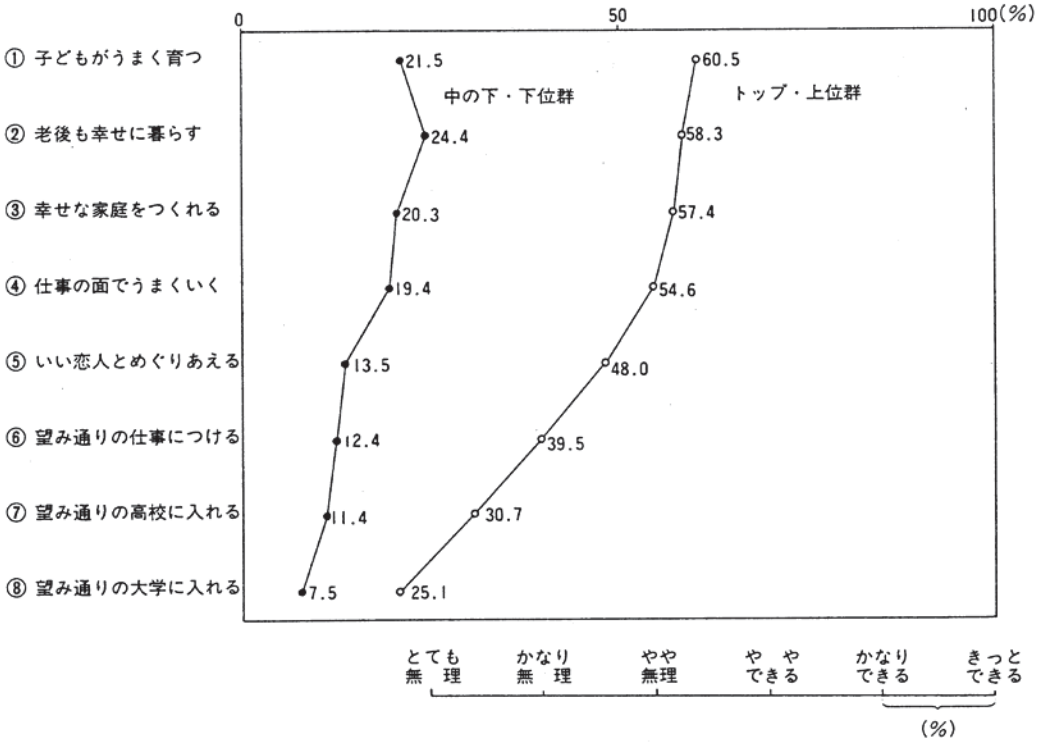
(図15) 未来像×まじめさ



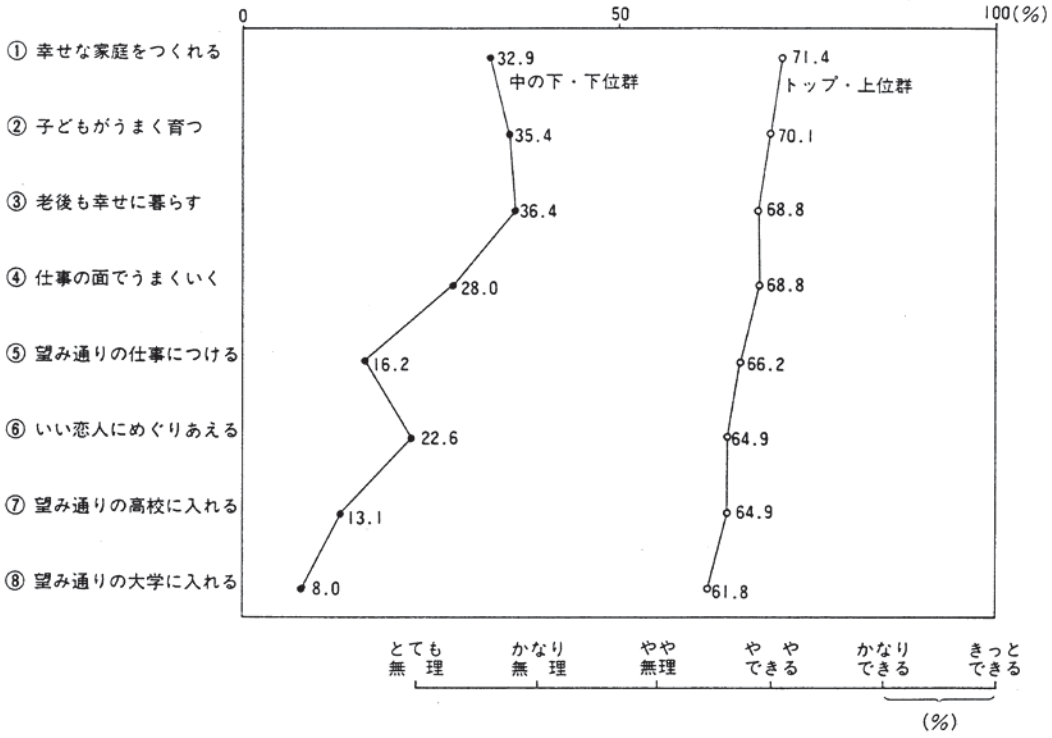
(図16) 未来像×がんばる力



(図17) 未来像×体力



（図18）未来像×数学の成績



さっそく、職業生活の項目に注目してみよう。「望み通りの仕事につける」で、トップ・上位群と中の下・下位群二つのグループの差は、「まじめさ」33%、「がんばる力」35%、「体力」27%、「数学の成績」50%となる。同じく、「仕事の面でうまくいく」では、「まじめさ」37%、「がんばる力」42%、「体力」35%、「数学の成績」41%である。したがって、将来の職業生活に対して明るい見通しを抱いているのが、やはり成績上位群に多いのは否定しがたいように思われる。

表7に、一流の職業人への達成意欲と数学の成績との関連を考察した結果を示した。この中で目を引くのは、歌手、プロスポーツ選手、芸術家といった成績と達成とがあまり関係なさそうな職種についても、トップ・上位群と中の下・下位群の間に、大きな差がでている点であろう。参考までに、未来像では数学の成績とほぼ同程度の規定力を示したがんばる力についても、達成意欲との関連を、**表8**に示してある。がんばりタイプと思っている生徒の方がビッグな目標への達成を予想しているのは確かだが、しかし、表7と比べてみると、成績の良し悪しの方が影響力が大きいのがわかる。

このように、職業面での未来像についても、残念ながら成績の良し悪しが生徒の心を暗くしているが、すでにふれた図15、16、17では、まじめさ、がんばる力、体力なども、将来の職業生活に相当の規定力が示唆されていた。成績が不振ぎみの生徒でも、体力に自信を持てれば、職業に明るい見通しを持てそうに見える。

しかし、残念ながら、そうした希望は抱けそうにない。なぜなら、**表9**に示したように、ここにあげた4つの項目には、かなり高い相関がみられる。これは、まじめさがトップ・上位の生徒の多くは、がんばる力、体力、数学の成績もトップ・上位であることを意味している。つまり、成績は悪くても体力なら負

（表７）がんばればつける職業×数学の成績

→すべての職業に差が存在

（%）

グループ	トップ・上位		中の下・下位	
尺度 / 項目	たぶんなれる	もしかしたら可能	たぶんなれる	もしかしたら可能
大会社の社長	53.9	17.1	18.0	5.2
	71.0		23.2	
国会議員などの政治家	17.3	45.3	19.9	2.2
	62.6		22.1	
テレビによく出る一流歌手	13.2	47.4	26.9	4.9
	60.6		31.8	
プロスポーツの一流選手	16.0	41.3	25.4	6.1
	57.3		31.5	
日本を代表する大学教授	12.0	44.0	9.2	2.1
	56.0		11.3	
難病の治療で知られる名医	10.5	44.7	16.1	2.7
	55.2		18.8	
日本を代表する芸術家	20.3	33.3	17.1	2.2
	53.6		19.3	

けないというタイプの生徒は、統計的には例外の事例に属する。がんばる力に自信があると、将来の職業生活は明るくなる。しかし、がんばる力に自信を持つためには、数学の良い成績が欠かせないというような構造が見えてくるように思える。

データの読み取りがやや複雑になったかもしれない。そこで、最後に類量II類を用い、未来の職業生活を支えるものを、明らかにしていこう。

先程の未来像の三領域から、「幸せな家庭をつくれる」「仕事の面でうまくいく」「望み通りの高校に入れる」をピックアップし、自己評価との関連を図19、図20、図21に示した（より多くの要素を検討するため、自己評価は、「とてもそう」ー「まったく違う」というスケールの項目を用いた）。

これらの図からは、以下のような傾向が読み取れよう。

●「幸せな家庭をつくれる」と思っている生徒は、友だちが多く、かつ友だちに信頼され、やさしい心を持っている。

●「仕事の面でうまくいく」と思っている生徒は、友だちが多く、勉強が得意で、努力型、そして、先生から信頼されている。

●「望み通りの高校に入れる」と思っている生徒は、何といっても勉強が得意で、先生から信頼されている。

生徒たちが仕事に役立つ能力として、がまん強さや体の丈夫さをあげていたのは、すでに述べた通りである。そして、幸せな家庭を築くためには、友だち関係が大事だという。しかし、将来の職業生活に自信を持つ生徒は、やはり勉強のできる生徒であった。そうした意味では、職業生活については、勉強の影をぬぐえないように見える。

（表８）がんばればつける職業×がんばる力

→数学の成績と比べ差は小さい

（%）

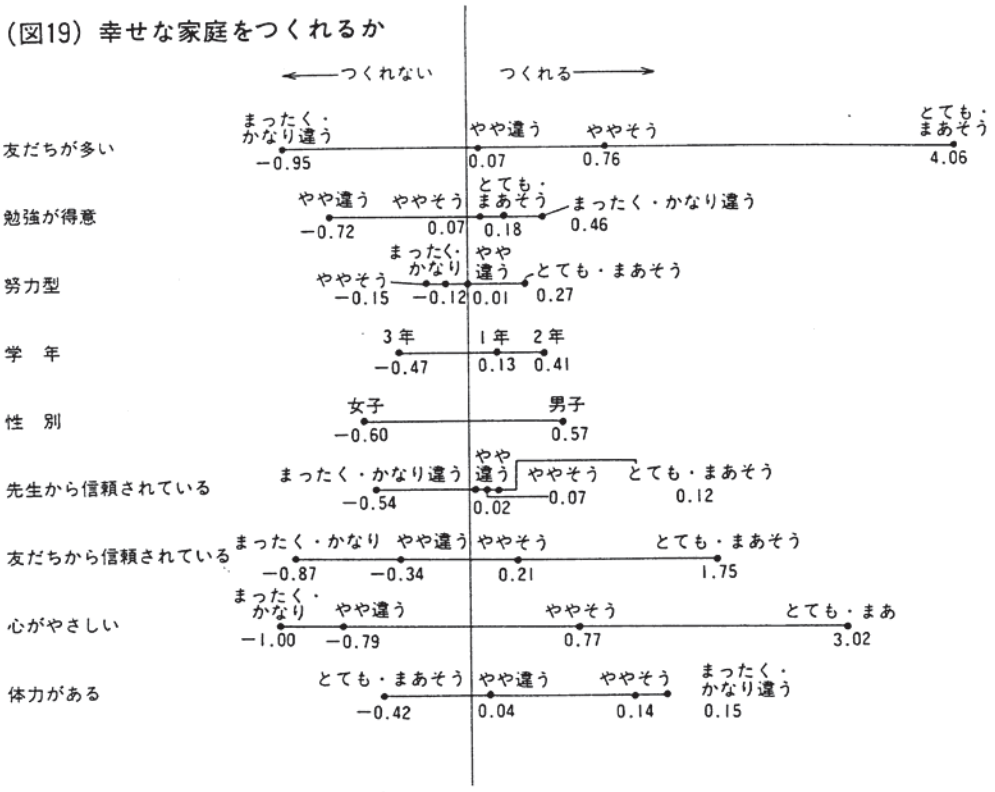
グループ	トップ・上位		中の下・下位	
尺度 / 項目	たぶんなれる	もしかしたら可能	たぶんなれる	もしかしたら可能
プロスポーツの選手	33.9	21.6	17.8	5.0
	55.5		22.8	
テレビによく出る一流歌手	30.6	20.0	18.6	6.0
	50.6		24.6	
大会社の社長	24.4	18.8	12.2	6.9
	43.2		19.1	
国会議員などの政治家	28.6	12.0	12.8	4.1
	40.6		16.9	
難病の治療で知られる名医	26.2	12.1	9.6	4.1
	38.3		13.7	
日本を代表する芸術家	20.1	10.8	13.1	3.4
	30.9		16.5	
日本を代表する大学教授	15.7	11.8	6.0	3.5
	27.5		9.5	

（表９）自己評価項目の相関表（ピアソン・コア）

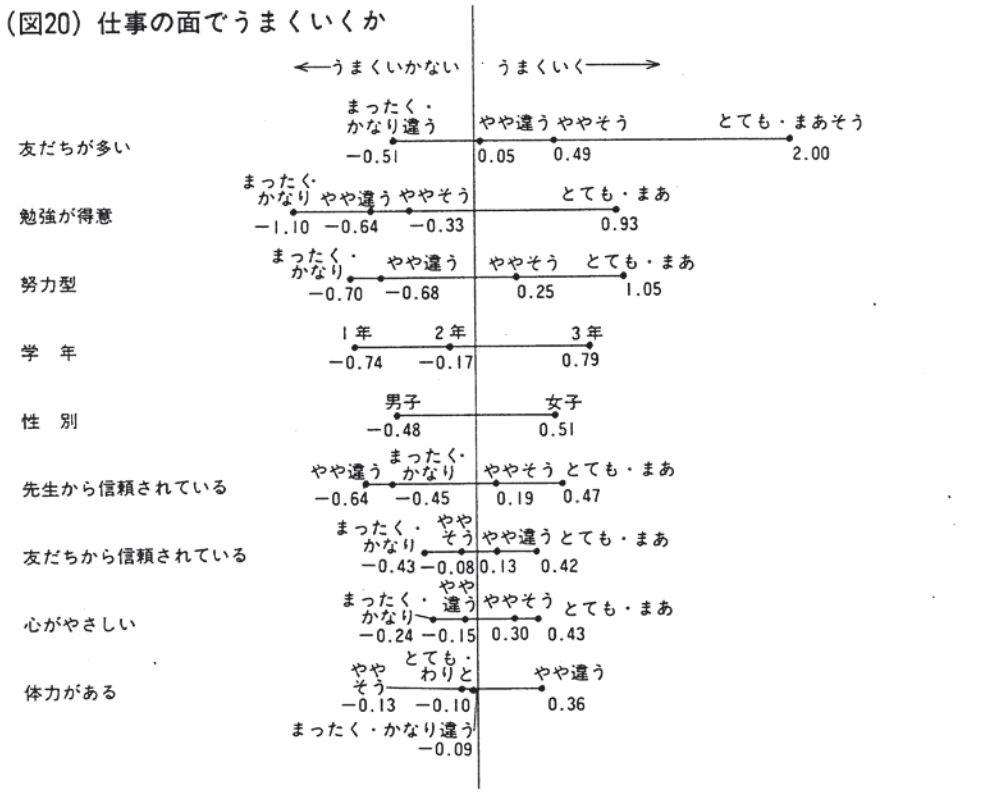
→項目間の相関は高い

	まじめさ	数学の成績	体力	がんばる力
まじめさ		0.4069	0.2847	0.4927
数学の成績			0.2751	0.3465
体力				0.5200
がんばる力				

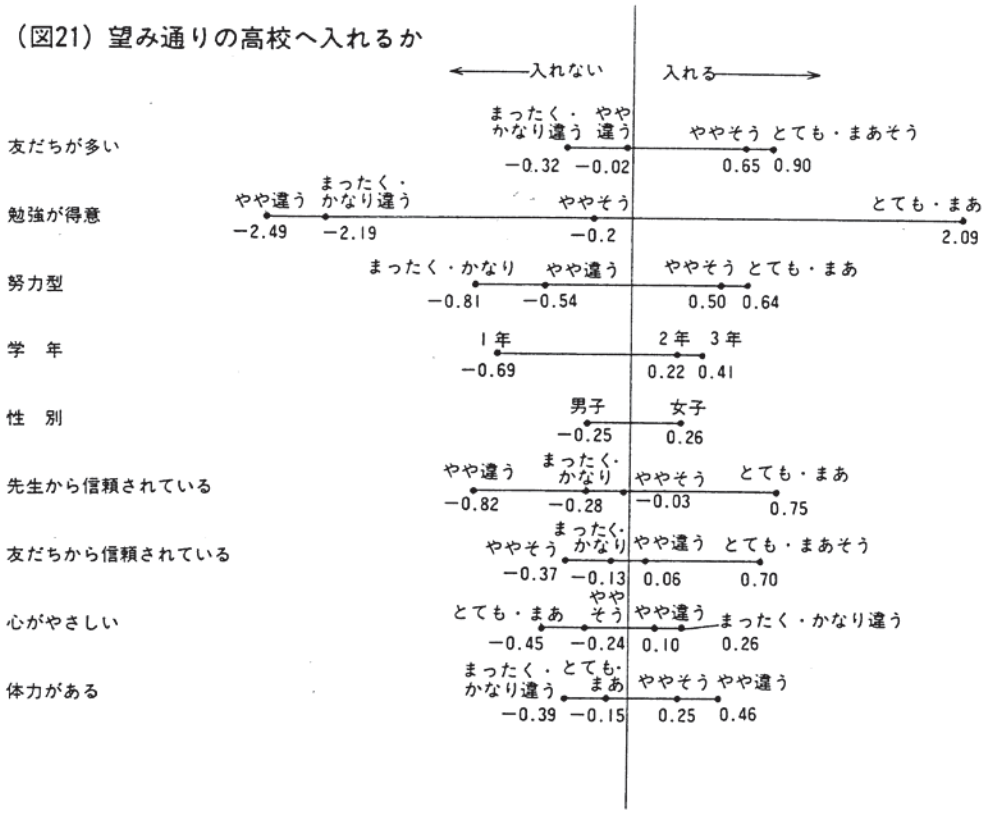
(図19) 幸せな家庭をつくれるか



(図20) 仕事の面でうまくいくか



（図21）望み通りの高校へ入れるか



3．父親像との関連

職業に対する見通しと、成績とのかかわりが非常に大きいことが示されてきた。それでは中学生たちにとって成績の良さが、明るい未来を保証するカギであって、成績の悪い生徒には閉ざされた未来しか存在しないのであろうか。ここでは成績以外のファクターを探るため、職業人としては一番身近な存在である父親の、モデルとしての機能を検討してその手がかりとしたい。

まず、クロスをとる前に単統集計を見ることにしよう。**表10**は仕事に対する、自分の向き不向きを判断させたものである。⑤から⑩、つまり、仕事の難易や対人的な仕事がよいかどうか、等については、ほぼ半々程度に、選択する者が分かれている。しかし、その他については、

- 疲れても、収入の多い仕事がよいが、自分の好みに合わないものはいやで、それくらいなら収入が少なくても自分に合った仕事を選ぶ（疲労度<収入<仕事の中身、の順で優先する）。――〈①、②〉。
- どちらかというと、人数の多い職場の方がよい――〈③〉。
- 頭のいる仕事や、決断力のいる仕事は避け、地味にこつこつやりたい――〈④、⑪、⑫〉。

といった傾向がみうけられる。特に楽をしたいとは思わないが、自分の能力にそれほど自信がなく、無理をしないでそれなりにがんばりたいというのが、現代の生徒たちの職業観なのであろう。

これまでにも確認されたように、中学生の職業選択に対する態度はそれほど確固たるものではない。また、ともすれば自信のなさからか、職業的な達成にあきらめに近い気持ちを抱く生徒も少なくない。それに加えて、職業人と接する機会を持たないから、生徒たちは外からの職業についてのインパクトを受けられないでいる。その意味で、父親の姿は身近な職業人であるだけに、特に職業観という領域ではかなりの影響力をもつものと考えられ

(表10) 自分はどちらのタイプの仕事に向いているか

(%)

A	絶対A	ややA	ややB	絶対B	B
① 疲れるが収入の多い仕事	35.6	49.6	11.5	3.3	楽だが収入のあまりない仕事
	85.2		14.8		
② 自分の好みには合っているが収入のあまりない仕事	22.4	46.1	20.4	11.1	自分の好みには合っていないが収入の多い仕事
	68.5		31.5		
③ 大勢の人といっしょにする仕事	28.9	34.6	21.6	14.9	ひとりまたは少人数でする仕事
	63.5		36.5		
④ 主に身体を使う仕事	23.9	39.1	27.3	9.7	主に頭を使う仕事
	63.0		37.0		
⑤ 誰にでもできる易しい仕事	23.6	32.9	31.9	11.6	知識が必要な難しい仕事
	56.5		43.5		
⑥ 責任のある難しい仕事	14.0	39.9	28.3	17.8	責任のない易しい仕事
	53.9		46.1		
⑦ 人に接する仕事	22.9	30.0	29.0	18.1	物をとりあつかう仕事
	52.9		47.1		
⑧ 決められたことをする仕事	18.3	33.4	28.2	20.1	自分で工夫する仕事
	51.7		48.3		
⑨ 収入が一定の仕事	19.4	27.7	29.1	23.8	働きにより収入が違う仕事
	47.1		52.9		
⑩ 内容がどんどん変わる仕事	14.4	30.0	33.9	21.7	毎日決まったことをする仕事
	44.4		55.6		
⑪ 決断力のいる仕事	12.5	21.7	36.5	29.3	親切さが必要な仕事
	34.2		65.8		
⑫ 人目をひくハデな仕事	10.2	21.1	44.1	24.6	落ちついた地味な仕事
	31.3		68.7		

る。そこで父親の存在が生徒の職業観の形成にどのような意味を持つのかを考察することにしたい。

表11～13は、表10の中から項目を一部とりだし、父親の中学時代のイメージとクロスさせた結果である。それぞれ父親の「数学の成績」(**表11**)、「まじめさ」(**表12**) について、父親の評価が良い生徒と悪い生徒とではどういった差が出てくるか検討してみよう。表の中ほどにある、父親評価の上位群と下位群の

(表11) 向いている仕事×父親の中学時代(数学の成績)の評価

(%)

A	父親の成績	絶対 A	やや A	※|差|	やや B	絶対 B	B
① 責任のある難しい仕事	上位群	18.4	43.7	16.4	24.2	13.7	責任のない易しい仕事
		62.1			37.9		
	下位群	12.0	33.7		27.9	26.4	
		45.7			54.3		
② 主に身体を使う仕事	上位群	23.9	33.5	9.5	29.1	13.5	主に頭を使う仕事
		57.4			42.6		
	下位群	23.3	43.6		24.0	9.1	
		66.9			33.1		
③ 誰にでもできる易しい仕事	上位群	18.0	28.3	19.4	36.3	17.4	知識が必要な難しい仕事
		46.3			53.7		
	下位群	30.3	35.4		24.8	9.5	
		65.7			34.3		
④ 人に接する仕事	上位群	27.5	29.8	11.9	26.5	16.2	物をとりあつかう仕事
		57.3			42.7		
	下位群	18.9	26.5		31.0	23.6	
		45.4			54.6		
⑤ 決断力のいる仕事	上位群	16.7	21.9	3.8	32.5	28.9	親切さがいる仕事
		38.6			61.4		
	下位群	11.0	23.8		39.2	26.0	
		34.8			65.2		
⑥ 人目をひくハデな仕事	上位群	10.4	21.1	3.3	41.2	27.3	落ちついた地味な仕事
		31.5			68.5		
	下位群	11.0	23.8		39.2	26.0	
		34.8			65.2		

父親の中学時代の数学の成績が

クラスで　トップ　上位　中の上　まん中　中の下　うしろの方

上位群　下位群

※|差|は 絶対 / やや } Aの上位群－下位群の絶対値

差の絶対値を見ると、表11と表12は、ほぼ似通った数値が並んでいる。つまり、父親がまじめで、成績も良かったと考えている者は、10%から20%近くの差で、責任ある、知識の必要な、難しい仕事を好んでいることがわかる。そして、上位群と下位群とでさらに差が開くのは、父親の「友人からの信頼度」とかけ合わせた表13である。特に①の「責任ある難しい仕事」については、40%の差で上位群は責任のある難しい仕事の方を選んでいる。

(表12) 向いている仕事×父親の中学時代(まじめさ)の評価

(%)

A	父親のまじめさ	絶対 A	やや A	※|差|	やや B	絶対 B	B
① 責任のある難しい仕事	上位群	18.7	44.9	18.6	22.8	13.6	責任のない易しい仕事
		63.6			36.4		
	下位群	12.5	32.5		29.3	25.7	
		45.0			55.0		
② 主に身体を使う仕事	上位群	23.6	32.2	12.9	29.5	14.7	主に頭を使う仕事
		55.8			44.2		
	下位群	30.9	37.8		23.4	7.9	
		68.7			31.3		
③ 誰にでもできる易しい仕事	上位群	17.9	27.9	19.8	36.3	17.9	知識が必要な難しい仕事
		45.8			54.2		
	下位群	31.2	34.4		25.4	9.0	
		65.6			34.4		
④ 人に接する仕事	上位群	27.5	29.8	11.9	26.5	16.2	物をとりあつかう仕事
		57.3			42.7		
	下位群	18.9	26.5		31.0	23.6	
		45.4			54.6		
⑤ 決断力のいる仕事	上位群	17.0	22.6	5.3	31.8	28.6	親切さがいる仕事
		39.6			60.4		
	下位群	10.8	23.5		34.7	31.0	
		34.3			65.7		
⑥ 人目をひくハデな仕事	上位群	8.3	18.8	11.3	43.0	29.9	落ちついた地味な仕事
		27.1			72.9		
	下位群	15.1	23.3		39.0	22.6	
		38.4			61.6		

父親の中学時代のまじめさが

クラスで　トップ　上位　中の下　まん中　中の下　うしろの方

上位群　下位群

※ |差| は 絶対 / やや } Aの上位群－下位群の絶対値

父親のまじめさや数学の成績よりは、父親が人から信頼されていること、つまり包容力のあることが、生徒の職業意識を健全に育てるのに関与しているのは、図中の数値の示す通りである。

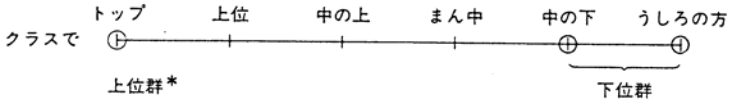
これに関連して、図22～24に父親の評価と現在の自分の成績やがんばりなどの自己評価とのクロスを図示してみた。ここでもやはり父親の成績が良かったと思える、あるいはまじめだったと思える生徒の自己評価が明るさ

(表13) 向いている仕事×父親の中学時代(友人からの信頼度)の評価

(%)

A	父親の信頼	絶対 A	やや A	※|差|	やや B	絶対 B	B
① 責任のある難かしい仕事	上位群	30.7	38.6	40.7	17.7	13.0	責任のない易しい仕事
		69.3			30.7		
	下位群	6.0	22.6		34.5	36.9	
		28.6			71.4		
② 主に身体を使う仕事	上位群	32.6	30.1	1.2	21.9	15.4	主に頭を使う仕事
		62.7			37.3		
	下位群	21.7	42.2		25.3	10.8	
		63.9			36.1		
③ 誰にでもできる易しい仕事	上位群	19.4	21.1	29.7	35.2	24.3	知識が必要な難しい仕事
		40.5			59.5		
	下位群	28.6	41.6		23.8	6.0	
		70.2			29.8		
④ 人に接する仕事	上位群	38.8	25.3	31.6	18.9	17.0	物をとりあつかう仕事
		64.1			35.9		
	下位群	7.2	25.3		39.8	27.7	
		32.5			67.5		
⑤ 決断力のいる仕事	上位群	16.0	20.9	12.8	33.8	29.3	親切さがいる仕事
		36.9			63.1		
	下位群	10.8	13.3		47.0	28.9	
		24.1			75.9		
⑥ 人目をひくハデな仕事	上位群	23.5	16.0	11.8	24.2	36.3	落ちついた地味な仕事
		39.5			60.5		
	下位群	8.4	19.3		48.2	24.1	
		27.7			72.3		

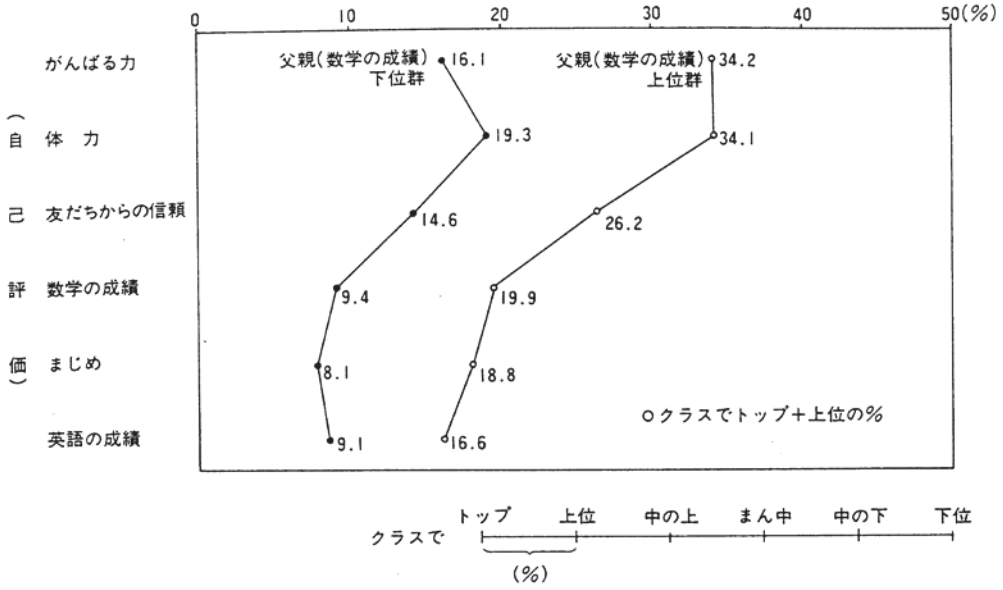
↑ 父親の中学時代の友人からの信頼が



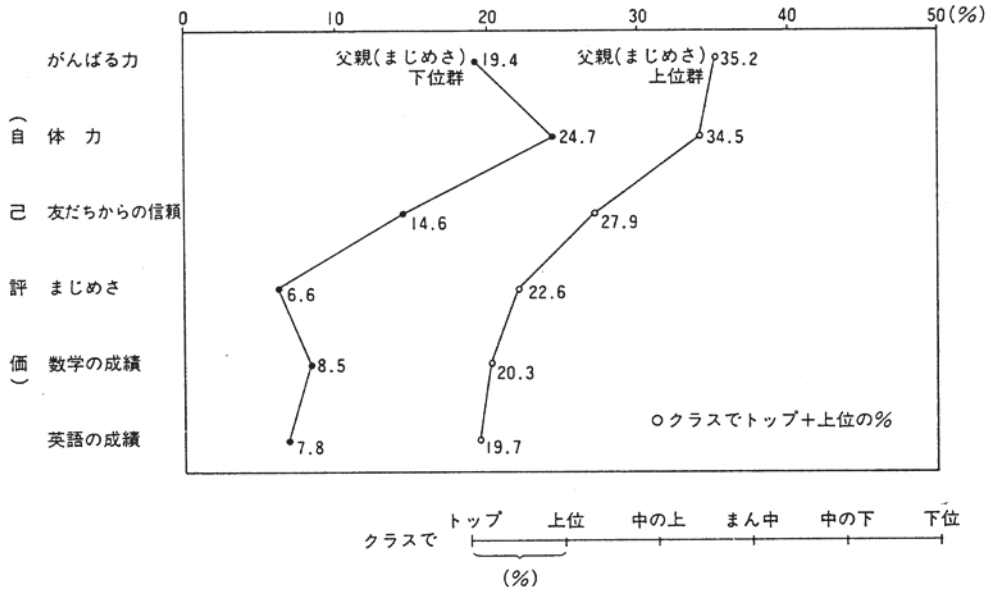
＊ 信頼度に関しては、「トップ」、「上位」に人数が集中したため、「トップ」だけで上位群とした

※ |差| は絶対／やや } Aの上位群－下位群の絶対値

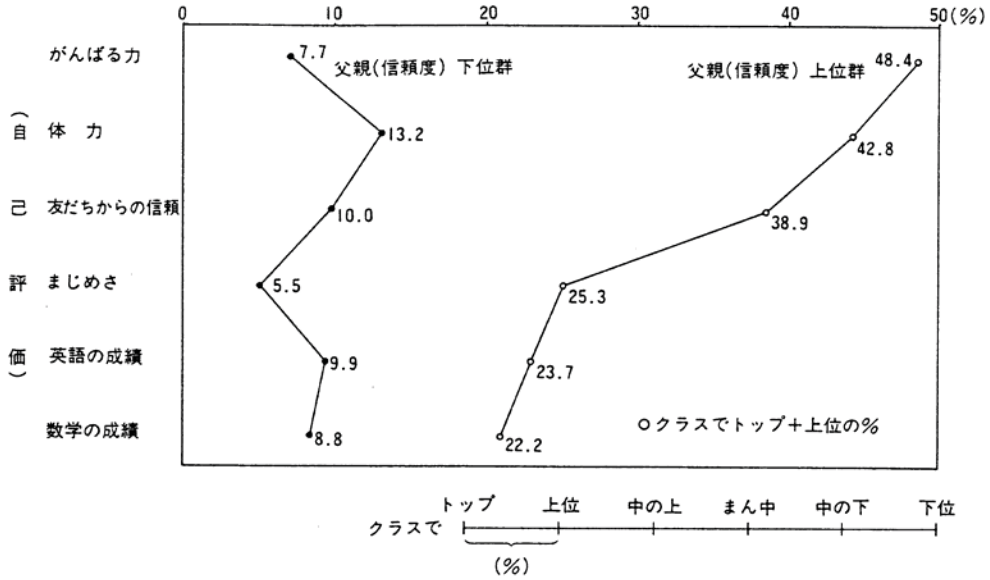
(図22) 自己評価×中学時代の父親の評価（数学の成績）



(図23) 自己評価×中学時代の父親の評価(まじめさ)



（図24）自己評価×中学時代の父親の評価（信頼度）



※父親上位群・下位群の区別は表11～13に同じ

を増すが、それよりもさらに決定的な意味を持つのが、父親に対する信頼度なのである。特に「がんばる力」、「体力」、「友だちからの信頼」の自己評価では、図22、図23の上位群と下位群の開きが10%から20%未満であるのに対し、図24では30%から40%の開きをもたらしている。

父親の中学時代を想定した評価は、当然現在の父親の姿を通しての印象からくるものであろう。したがって、中学時代、人から信頼されたであろう父親は、現在も社会において信頼をかちえている父親、ととらえ直すことができる。そのような父親の許で育っている生徒は、自分についてもやる気があり、体力があり、友だちから信頼されているというイメージを抱いている。つまり、社会の中で立派に責任を果たしていける父親の姿が、生徒にとっての何よりのはげましになるのであろう。

現在、子どもの心の中で父親の姿は影をひそめ、母親の影響力が増加しているといわれる。中学生に与える母親の影響力については別の機会に調べる必要があろうが、父親が子どもに与える影響力も、少なくないことが明らかにされた。本調査では、父親との関連を分析するのが目的でなかったため、父親像との関連をくわしく追うことができなかった。しかし、今回の調査結果を手がかりとすると、今後中学生の職業観を分析するにあたっては、父親をはじめとする生徒をとりまく職業人――母親、教師、マスコミで報道される人々等々――の影響をも視点にいれた研究が望まれる。

まとめに代えて

職業面での見通しという点から見ると、現代の中学生たちは、極めてアンバランスな状況に置かれているように思われる。

なぜなら、一方で、テレビ等のマスコミから豊富な情報がもたらされ、スペースシャトルの宇宙飛行士のように直接見ることはできないような職業についても、生徒たちは、何らかのイメージを持つことができる。それに比べ、人が労働する姿を直接に見た経験が乏しいことは、すでに指摘した通りである。この直接・間接経験のアンバランスから、生徒たちは、現実との接点に乏しいまま、自らの職業生活を、楽観的に思い描いてしまう。しかし、直接経験に乏しいため、職業について多様な価値観を持つことができず、その結果、成績中心の職業観へ傾斜しやすい。そして、高い達成意欲を持ち明るい未来像を抱くのは成績上位群の生徒で、下位になるにつれて、未来像が暗さを増す状況が進んでいる。

この状況を改善するには、やはり、生徒たちが労働と体験を膚で感じられる場と機会を増やすことが重要であろう。このところ、勤労体験学習の導入など、学校の中でさまざまな体験を重視する動きが強まっている。しかし、学業成績が重視されがちな現代の中学校に、体験学習の機能で期待できることは限られているといわざるを得ない。

なお、第三章で紹介した父親についてのデータは、職業観の形成に、親が案外大きな役割を持っていることを示唆している。この点、今回は問題提起に留まったが、職業人としての親のあり方を、もう一度考えてみる必要があるのかもしれない。